
IS 拳で戦うハメになりました

最中 熊二

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS 拳で戦うハメになりました

【Nコード】

N8924Q

【作者名】

最中 熊二

【あらすじ】

とある研究者の尻拭いで、IS学園に転校することになった秋葉咲也、やはりというか何というかハーレムで（主に一夏が）なんだか、幼なじみも学校にいて、なんだかわやくちやになる、学園ラブコメ！！

転校

『IS』

正式名称『インフィニット・ストラトス』。宇宙空間での活動を想定して作られたマルチフォームスーツ。

しかし『製作者』の意図とは別に宇宙進出は一向に進まず、結果このスペックを持てあました機械は『兵器』へと変り、しかしそれは各国の思惑から『スポーツ』にと落ち着いた——所謂、飛行パワードスーツ。

しかしこの『IS』には致命的な欠陥があった。

それは、女性にしか使えないと言う事。

その操縦者を育成するのが育成する学校がIS学園。無論女子しかない

現在俺はその1年1組で自己紹介をさせられていた。

まてまて、お願いだから聞いてくれ、ああ、だめだ。ブラウザの戻るボタンを押さないでくれ。俺は変態じゃない。しかし作者は変態だ。あれ？違うだろ。

男だけどIS使えるんだよ。

最前列でポカーンと口開けてる男子と同じでな。

「キャーーーーー」

鼓膜破れるかと思った。アメリカから留学してそうそうこの仕打ちはなんだ。

「落ち着け」

担任の織斑先生が、騒いでる生徒の頭を出席簿ではたいていく。最前列の男子は相変わらずポカーンだ。織斑一夏だったよな。教官

の弟って。

「えーと、アメリカから来ました、秋葉咲也あきはひでゆきです。三年間よろしく
お願いします。」

「キヤーーーーーー」

やっぱりかよ。また織斑先生が（以下略）。

（一夏side）

少し線の細い転校生は、女子の黄色い声援に顔をしかめる。

髪の毛は茶色で、顔は……モテるタイプだと思う。手の籠手は、
忍者が使ってるような手の甲と腕を守るタイプで、紫色だ。

「では、HRを終わる。各人はすぐに着替えて第七グラウンドに
集合。今日は二組と合同でIS模擬戦闘を行う。解散！」

パンパンと手を叩いて千冬姉が行動を促す。なにせ、このままだ
とクラスにいる女子と着替えなくてはならなくなる。それは困る。
非常に困る。

なので俺は急いでクラスから移動しなくてはいけないのだ。ええ
と、確か今日は第四アリーナ更衣室が空いているはずだ。

「おい織斑。秋葉の面倒を見てやれ。同じ男子だろう。」

おっとそうだった。やっぱりそうなるよな。

「君が俺と同じ境遇の人？」

「ああ、まあそれは置いといて。とにかく移動が先だ。女子が着替
え始めるから。」

説明すると同時に行動に移す。俺は秋葉とともにそのまま教室を
でた。

「とりあえず男子は空いてるアリーナ更衣室で着替え。これから実
習のたびにこの移動だから早めに慣れてくれ。」

「了解、んじゃまず前の尖兵から片付けなくちゃな」

「へ？」

そう、HRが終わったのだ。早速各学年各クラスから女子生徒が
情報選手のために駆け出している。波に飲まれたら最後、質問攻め
の拳句授業に遅刻、鬼教師の特別カリキュラムが待っているのだ。
絶対にそうなるわけにはいかん。

「さて行くぞ」

「え？ちよ、秋葉。」

秋葉はこんなトコロでISを部分展開しやがった。ていうか、あ
の籠手ISだったのかよ。紫色の巨大な腕が登場する。

「相殺……点火」

肘から炎を吹き出し俺もろとも女子の波から抜けていく。

「よし到着！」

「いつもより疲れた……秋葉、お前どうやったんだ？」

「俺はただ、声を集めてエネルギーに変えただけだよ。細かいこと
は後で聞いてくれ、まもなく時間だ。あと、秋葉じゃなくて咲也で
いいよ。」

「へ、時間って……やばっ」

(咲也 side)

さて、どうしたものかな。なんか、幼なじみがいるんだけど。

「ふえ？あんたどこから湧いてでたのよ。」

こっちのセリフだ。

「苗字変わってるから全然わかんなかったわ」

「まあ、そうだろうなあ」

その幼なじみというのは、

「久しぶりだな、鈴」

「ほんと何年ぶりかしらね、サク」

「久しぶりの再開のところ悪いんだが」

「はい？」

俺と鈴の頭に出席簿が降ってきた

「では、本日から格闘及び射撃を含む実践訓練を開始する」

「はい！」

「出席簿アタック思ったより遥かに痛いな……………これだけでどれほどの細胞が死んだのだろう…」

と、俺が適当なことを行っているさなか

「……………咲也のせい咲也のせい咲也のせい……………」

と、ブツブツつぶやいているやつもいた（誰かはご想像にお任せするぜ！！）。

「今日は戦闘を実演してもらおう。ちょうど活力があふれんばかりの10代女子もいることだしな。——凰！オルコット！ついでに、秋葉！」

「な、なぜわたくしまで！？」

おお、イギリスの代表候補生じゃないか（棒読み）それにしても俺、ついでか。

「専用機持ちはすぐに始められるからだ。いいから早く前に出る」

「だからってどうしてわたくしが……」

「咲也のせいなのにどうしてアタシが……」

あーあー聞こえない聞こえない。

「お前ら少しはやる気を出せ。——アイツらにいいところを見せられるぞ？」

うん？なんだ？教官、誰かを売らなかったか？

「やはりここはイギリス代表候補生、わたくしセシリア・オルコットの出番ですわね！」

「まあ、実力の違いを見せるいい機会よね！専用機持ちの！」

なぜかいきなりやる気ゲージがマックス近い。なんだ？勝つたら一夏とデートなのか？どうでもいいが、いろいろあからさまだよな。

「それで、相手はどちらに？わたくしは鈴さんとの勝負でも構いま

せんが」

「ふふん。こちらの台詞。返り討ちよ」

みなさーん、俺の存在忘れてませんか？

「慌てるなバカども。対戦相手はこいつだ。」

織斑先生が指さす先は——俺だった。

「おい、小娘どもいつまで惚けている。さっさと始めるぞ」

「え？あの、2対1で？……？」

「いやさすがにそれは……」

「先生、俺、死にます」

「安心しろ。今のお前たちならすぐ負ける」

正気なの？教官。

(鈴side)

「では、はじめー!!」

号令と同時にアタシとセシリアが飛翔する。サクはそれを目で確認してから飛び立った。

「手加減しないよ」

「望むところだ」

サクのISは紫色。腕が何故か多少大きめ。すぐにISから情報が入ってくる。

「……なにコレ」

(IS名 紫雲)

武器 なし

シールドエネルギー 100%

EXエネルギー 0%

(詳細情報不明)

『鈴さん!! 見ました!?!』

「うん…変わった機体…このEXエネルギーってのもわかんないし…
…何より、武器なし。どういう事……」

(咲也 side)

最悪だ、正攻法では死んでしまう。

今使っている、俺のIS——紫雲は、超近距離型。つまりどうい
う事かというと。

「拳で戦う」

姉さんによると。

「あの白式をパクッて、武器として使われているものを。すべて単
ンオフ・アビリティー
一仕様能力として割いてみたわ」

だそうだ、そんなんで代表候補生二人にかなうはずがない。

しかも機体は最先端の第3世代型だぞ。いやまあこっちのほうが
世代数は上か。

ええい、やるだけやってやる。

そんなこんなしてるうちに、セシリアのビットからレーザーが出るが。右手で受け止める。

鈴の甲龍の衝撃砲が打ち出されるが。これは左手で受け止める。

紫雲の単一使用能力の一部、「相殺」。紫雲唯一の武器、という能力。両手で受け止めたエネルギーを吸収。EXエネルギーに変換し、貯めこみ、回復と攻撃に使う。ちなみに一夏を連れて、女子の大群を抜けた時もこの力を使った。

と、前から鈴が迫ってくる。かかったな。

こちらからも迫る。鈴が連結済みの「双天牙月」を振り上げるが。逃げて、鈴のISに触れる。

紫雲は、武器がない分、むちゃくちゃ速い。そして、相殺は手に触れているエネルギーならなんでもいいわけで。とどのつまりどういう事かというところ。

俺は甲龍のシールドエネルギーを吸収した。

具体的に説明すると、ISに触れると、嫌でも絶対防御が発動、外側に展開。その外側に展開したエネルギーを回収。シールドエネルギーを削らせ、自分は攻撃の準備を整える。

「えっ!？」

もう遅い、鈴のシールドエネルギーはもう半分くらいしか残ってない。

俺は攻撃に移る。

(剛力突破、発動!!)

紫雲の単一使用能力の真骨頂だ。腕の大きさが二倍ほどに膨れ上がる、攻撃の効果を増加させる技だ。殴ると同時に相殺でエネルギー

「も削る技なのだが、さすがにひどいのでそのままの勢いで機体に触れる。」

剛力突破中は、相殺の効果も増加するので、鈴のエネルギーは一気に0になる。

「どういう事なんですの!？」

あのあと、オルコットさんもかるーくあしらい、この試合に勝った。

ちなみに俺は現在食堂で、男子一人、女子3人に問い詰められていた。

隣に鈴、向かいはオルコットさんとクラスメートの篠ノ之さんに挟まれるように一夏が座っている。というか座らされている。

「代表候補生でもないのに、第3世代型2台を相手を軽くあしらうなど……異常だ!！」

篠ノ之さん、異常って。というか、この人ってひょっとして……

「ついでに、鈴さん!！」

「ふえ、な、何？」

「なぜこのような殿方と知り合いなのですか!？」

「えっと、その、ちょっと事情が……サク!! たすけて!!」

……頼まれちゃー仕方がない、のか？

「えーと、俺が生まれたのはそもそも中国なんだ。当時は李^リ敖^{シャオ}驚と名乗っていたつけ。

で、そんな向かいに住んでたのが鈴、まあ、いわゆる幼なじみでやつだな。そして、鈴が引っ越したあと、当時親がいなくて姉と二人で住んでたんだが、そんな時知ったんだよ、IS、という名の兵器の存在をな。

研究者であり、ハッカーであつた姉はすぐに篠ノ之束のパソコンに侵入、研究し、ついにISをつくりだした。そんな時に間違えてつついちまって、自分がIS動かせるつてのを知ったんだけどな。当時中学2年生か。」

「おいちよつと待て。じゃあお前の姉はどれほどの天才なのだ」

「どうしてそういう事になるんだ？」

一夏馬鹿だ

「私の姉のパソコンだぞ。とんでもないセキュリティがかけてあるはずだし、しかもそれを改造するなど……」

ああ、やっぱりこの人篠ノ之束の妹か

「ああ、俺の姉は天才だった。ただ、その頭脳が、パクることと、アレンジすることにしが使えなかったんだ」

そっからが大変だった。発表したものの篠ノ之束の開発したもののパクリだつていうことがバレてな。姉は俺に被害を与えるまいと、近所に住んでいた日本人、秋葉さんに預け失踪した。

そこで俺は咲也となった」

「じゃあ、なんで鈴はお前のことサクって呼んでるんだよ」

「ああ、それは姉が日本人だったからさ。養子らしいぜ。姉がつけてくれた。失踪した親に比べりゃこっちの名前のほうがしっくりくる」

「で、サクはどうしてアメリカから転校してきて、さらに専用機まで持ってるのよ」

「それから先はものすごく話が長くなるんだけそれでいいのか。まもなく授業だが」

「……へっ!?!」「」「」

「さてと、みんなで主席簿アタックされに行こうか」

転校（後書き）

はあ、やっと終わった。どうでした。主人公はチートじゃないです。戦闘シーンで、やけに落ち着いているのは、試合が毎回こんな感じだからですよ。

転校生は銀髪の軍人

前回の話の続きをのらりくらりとかわしていた今日この頃。（だいたい数週間後）

俺の部屋は現在俺しかおらず貸切状態。ベットでゴロゴロ。

（と、いうか、ついに今月かよ。だりい。）

壁にかけたカレンダーで確認する。

学年別個人トーナメント。

文字通り学年別のIS対戦トーナメント。これを一週間かけて行うらしい。一週間もかかる理由は単純明快。全員強制参加だから。

一学年が大体120名。これをトーナメント形式でやるものだから、規模も相当なものらしい。1年は浅い訓練段階での先天的才能評価、2年はそこから訓練した状態での成長能力評価、そして3年はより具体的な実戦能力評価となっている。

特に3年生の試合は大掛かりで、IS関連の企業のスカウトマンはもちろんのこと、各国のお偉いさんが見に来ることもあるらしい。ますますだりい。

そのだりいテンションのままドアに向かうと、ノブに手をかけたところでノックが響いた。

「サク、いる？」

「いませーん」

「じゃあ、入るわね」

「どうしてそうなった」

朝から俺の発言をスルーしてくれたのは、凰・鈴音。俺の幼なじみに限りなく近い地球人で（普通に言え）IS『甲龍』の専属操縦者。生まれたときは近所だったけど、鈴のほうに引越した。で、活動的なツインテール。あと胸が小さい

「な、何じつと見てるのよ……」

「……………ああ、いや、なんでもない」

なんだかおかしくなったので強引に話を切り替える。

「ところで俺は今から夕食に行くんだが、鈴はどういう用事があったんだ？」

「ふふん。まさにそうじゃ「よし食堂行くか！」「……………なんでかぶせて発言してくるのよ」

いろいろめんどくさいからに決まってるだろ。

「まあ、付き合っただけでもいいけど」

「そりゃどうも」

鈴と並んで歩き出す。ちょうど夕食の時間だからだろうか、ところどころドアが開いて寮生が出てくる。

「……………」

「そういえば……………」

「ん？」

「あんたって、どうして織斑先生と知り合いなの？」

「いや実は……………あの後、俺、ドイツのIS配備特殊部隊、『シユバ

アルツェ・ハーゼ』——通称『黒ウサギ隊』に所属してたんだよね。そこで教官、もとい織斑先生と知り合ってたって感じ。

んで、姉のいるアメリカに渡ったあと、ここに来たわけだ。」

「なんでアメリカ……」

「そりゃ、中国から追い出されたからだろ。篠ノ之束のISパクツた上に、まだこりてないんだから」

「にしても、その機体オリジナル性が強くない？」

「いや、根底は変わらねえよ、というか、第四世代型パクツただけでアウトなんだから」

「は？」

「ん？」

「ちょっとまって、第四世代型って何？まだどこの国も、第三世代型の開発に漕ぎ着けたところなのに」

「細かいことは知らねえよ、俺はこの機体に乗ってるだけなんだから。俺が知ってるのは、白式が第四世代型ってこと。それをパクツた紫雲は、第四世代型ってこと。」

「そんなの勝てるわけ無いじゃん……」

「いやいや、でも、俺満身創痍だったぞ。シールドエネルギーもまもなく尽きるかもって所だったし」

「でも……」

「大丈夫だって。鈴は強いから」

そう、こいつは誰よりも強いのだ。諦めない心も、すべて。

「ねえ、聞いた？」

「聞いた聞いた！」

「え、何の話？」

「だからあの織斑君の話しょ」

「いい話？悪い話？」

「最上級にいい話」

「聞く！」

「まあまあ落ち着きなさい。いい？絶対これは女子にしか教えちゃダメよ？女の子だけの話なんだから？実はね、今月の学年別トーナメントで優勝すると、織斑君と付き合えるって話なのよ。」

「ブホッ」

思わずお茶を吹き出してしまった

「あんた突然どうしたの？」

「いや、今耳にとんでもない情報が入ってきたから、思わず吹き出しているところだ」

「ああ、あの噂ね、結構有名になってるわよ。まあ、どうせガセでしょうが。」

「お前は便乗しないのか？」

「え！？なんで？」

「お前って、一夏の事好きじゃなかったっけ」

「ブホッ」

今度は鈴が吹き出した。

「あ、アンタ、あんなやつのこと好きになるわけないじゃん」

「そーかい。」

「あ、一夏だ」

食堂に入ってきた一夏は、あっという間に女子の雪崩に飲み込まれた。まあ、おおよそさっきの噂のことだろう。俺は、聞くこともできなかった。

(あぶないあぶない)

鈴は、体力回復絶賛実施中の咲也に、ほっと胸をなでおろした。

(あのまま問い詰められてたら……)

「おい、鈴」

「へ？」

「あれ……」

「……何あれ？」

夕食を取りに来たであろう、箸とばったり出くわして固まってる一夏

(なに、あの、明らかになんかありました的なムードは……はあ、サクともああいうことになればむしろ嬉しいんだけど……)

「フア~~~~」

(こんな性格だもんね)

無関心な咲也は、席で大あくび。

一夏は質問攻めにあっていた

(一夏side)

「ええとですね、今日は転校生を紹介します！しかも二人です！」

今日の朝のHRで山田先生が紹介した。

（なんでうちのクラス……？普通分散させるもんじゃないのか？）

そんな至極まっとうなことを考えていたら、教室のドアが開いた。

「失礼します」

「……………」

クラスに入ってきた二人の転校生を見て、ざわめきがピタリと止まる。

だってそのうちのひとりが——男子だったんだから

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、皆さんよろしくお願いします」

転校生のひとり、シャルルはにこやかな声でそう告げて一礼する。あつけにとられたのは約1名を除くクラス全員がそうだった。咲也以外は。

「お、男……？」

誰かがそうつぶやいた

「はい、こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を——」

人懐っこそうな顔。礼儀の正しい立ち居振る舞いと中性的に整った顔立ち。髪は濃い金髪。黄金色のそれを首の後で丁寧に束ねてい

る。体はともすれば華奢に思えるくらいスマートで、しゅっと伸びた足が格好いい。

印象は、誇張じゃなく『貴公子』といった感じで、特に嫌味のない笑顔が眩しい。

「きゃ……」

「はい？」

「きゃああああああ——っ！」

ソニックウェーブというやつだろうか。いや冗談じゃなくて。クラスを中心を起点にその歓喜の叫びはあっという間に伝播する。

「男子！3人目の男子！」

「しかもうちのクラス！」

「美形！守ってあげたくなる系の！」

「地球に生まれてよかった~~~~」

元気だね、うちのクラスの女子一同は。いや冗談じゃなくて。咲也はあまりのうるさに、顔をしかめてるし。

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

めんどくさそうに千冬姉がばやく。仕事がというより、こういう十代女子の反応が鬱陶しいんだろう。学生の時も一般的な女子とはつるんでなかったもんなあ。

「見、皆さんお静かに、まだ自己紹介が終わってませんから〜！」

忘れていたわけではないが——というより意識の外に追いやるの

が難しいもうひとりの転校生は、見た目からしてかなりの異端であった。

耀くような銀髪。ともすれば白いそれを、腰近くまで長くおろしている。綺麗ではあるが整えている風はなく、ただ伸ばしっぱなしという印象のそれ。そして左目の眼帯。医療用のものではない、ガチな黒眼帯。20世紀の映画戦争に出てくる大佐がしていそうな、あれ。そして開いている方の右目は赤色を宿しているが、その温度は限りなくゼロに近い

印象は言うまでもなく『軍人』身長はシャルルと比べて明らかに小さいが、その全身から放つ冷たく、鋭い気配がまるで同じ背丈であるように観るものを感じさせていた。

ちなみにシャルルは男にしては小柄な方だが、もうひとりの転校生は女子の中でも若干背が低い部類だろう。

「……………」

当の本人は未だに口を開かず、腕組みをした状態で教室の女子達をくだらなそうに睨みつけている。しかしそれもわずかのことで、今はある一点……………千冬姉だけに向けていた。

「……………挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

いきなり佇まいを直して素直に返事する転校生——ラウラに、クラス一同がぼかんとする。対して、異国の敬礼を向けられた千冬姉はさつきとは違った面倒くさそうな顔をした。

「ここではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、ここではお前も一般生徒だ。私のことは織斑先生とよべ」
「了解しました」

そう答えるラウラはぴつと伸ばした手を体の真横につけ、足でかかとを合わせて背筋を伸ばしている。どう見ても軍人、そうではなくても軍施設関係者である。しかも千冬姉を教官と呼んでいるので間違いなくドイツ。

——とある事情で千冬姉は1年ほどドイツで軍事教官として働いたことがある。その後は1年くらいの空白期間をおいて、現在のIS教員となっただけらしい。

らしいというのは、山田先生や他の学校関係者や咲也に聞いたからだ。咲也も千冬姉のもとで訓練していたことは、ラウラと一緒に訓練していたのかな？どっちにしろ本人からはまだ何も教えてもらってない。そこはまた事情があるんだろうが……

（でも俺にはどこで何をしているかくらい教えてくれよなあ）

何というか落ち着かないじゃないか。いや、別に寂しいとかではなくて。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「……………」

クラスメイトたちの沈黙。続く言葉を待っているのだが、名前を口にしたらまたかいのように口を閉ざしてしまった。

「あ、あの、以上……ですか？」

「以上だ」

空気にいたたまれなくなった山田先生が出来る限りの笑顔でラウに訊くが、帰ってきたのは無慈悲な即答だけだった。こらこら先生をいじめるんじゃない。見ろ、泣きそふな顔をしているじゃないか。まったく。

そんなことを考えていたせいなのか、ラウラとばっちり目があつた。

「！貴様が——」

うん？なんだ？つかつかとこっちにやってくるぞ。

バシンッ！

「……………」

「う？」

殴られるかと思って身をすくめたが、当たるはずの衝撃がなかった。恐る恐る目を開けてみると、咲也がラウラの手を払っていた。

「さ、咲也……………」

「だめだ、ラウラ」

「……………う、うああああああああ——」
咲也の前で、ラウラは泣き崩れた。

転校生は銀髪の軍人（後書き）

なんかほとんど原作丸写しになった気が…

オリキャラ紹介（前書き）

俺、テスト期間中なんです

オリキャラ紹介

秋葉咲也

中国生まれの日本人。両親は中国人だが失踪。その後秋葉家に引き取られる旧姓は李赦驚。咲也は姉がつけた名前。

全体的に線が細い。茶色の髪の毛。わかんなかったらは、これはゾンビですかの相川歩を茶毛にしろ。

性格は、めんどくさがりで冷静、しかし、いざとなるとかなり頼りになる。

『他人によって仲間の夢が壊されること』を最も憎む。理由はそのうち出てくるでしょ。きつと

姉の尻拭いでISを使える男として入学。鈴とは中国での幼なじみ。

ラウラとは部隊で知り合い……いざこざあった。それについては以後明らかに。

専用機は紫雲。

紫雲

第四世代型マイナスアルファな機体。武器がないという異例の機体であり単一仕様能力がないとほぼ意味をなさない。待機状態は忍者風の手の甲と腕を守るタイプの籠手。待機状態でも相殺だけは使える。

EXタンク

相殺で吸収したエネルギーを一時的に貯めるところ。ここから攻撃するエネルギーをとったり、回復に使ったりできる。また、ISのエネルギーを直接タンクに貯めることもできる。ISを待機状態にするたび、貯めたエネルギーは放棄される

以下すべてが単一使用能力

相殺

両手に触れたエネルギーを吸収する。

回復

EXタンクに貯めたエネルギーを消費して、シールドエネルギーを増やす。

変換

エネルギーをEXタンクにためる

剛力突破

EXタンクに貯めたエネルギーを消費して、攻撃能力、相殺の吸収率を上げる技。見た目は、使ったところが大きく見える。その他、片手に集中して使用することもできるし、足に使用すると移動速度が増加する。

リ・アイラン
李愛蘭

日本生まれの中国人。咲也の名付け親。いろんな意味で天才。そのうち出てくる。紫雲の製作者。いろいろ胡散臭い。電波女と青春男の藤和女々を一九歳ほど若くしろ。

オリキャラ紹介（後書き）

「ただいま脳内でちっちゃい作者が分裂しています」

作者A「おい」

作者B「なんだい？」

作者A「なんで分裂させてんだよ。書くのめんどくさいだろ！！というか、作者テスト期間中なんですか！？」

作者B「まあまあ、落ち着け」

咲也「そうですよ」

作者A「いたんだ」

咲也「ところでツツコミいいですか」

作者A「どうぞ」

咲也「なんで第三部みたいな中途半端なところでオリキャラ紹介やっつてんだよ！！っていうかほかされているところ多過ぎで、半分ほどわけ分かんねえよ！！そして何より姉さんの紹介絶対手抜きだろ！！」

作者B「落ち着いて、深呼吸」

作者B「咲也「スーハー」」

作者A「てめえら、本当にこの物語盛り上げるつもりか？」

作者B「咲也「もちろん」」

作者A「じゃ、もっと普通にやろうぜ」

作者B「え、でも、咲也の性格は少しくらいひねくれていてもいいと思うんだ。とにかく、恋愛もサクリ行きたいしね。咲也だけにそれに、ハーレムは一夏に任せておいていいと思うんだ。もともととんでもなくモテるしね。」

作者A「咲也「この物語がおかしくなる原因はきつとてめえだ」」

ってな感じで、問題点を突き飛ばして、この物語は続きます。

少しの進展と多大な憂鬱

次の時間が、実習らしく、教官、もとい織斑先生に許可をもらい、保健室でラウラを介抱することにした。

「色々すまない」

「いや、こっちもすまん」

話は長続きはしない。俺は、ラウラがどうして一夏を殴ろうとしてしまったのか知っている。

教官は当時ISの世界選手権、『モンド・グロッソ』のチャンピオンだった。そして第二回も、着々と決勝戦に向かっていった。

しかし、教官は、決勝戦を棄権した。誰もが教官の2連覇を確信していただけに大きな騒動を呼んだ。

その理由というのは、教官の弟——一夏が、謎の組織に誘拐され、一夏を助けに行ったからだ。今でもなぜ一夏が誘拐されたのかわからない。

一夏の誘拐事件については世間的には一切公開されなかったのだが、事件発生時に独自の情報網から監禁場所に関する情報をドイツ軍はだいたい把握していた。そして教官はドイツ軍からの情報によって弟を助けたという『借り』があったため、大会終了後に一年ちよつとドイツ軍IS部隊で教官をしていた。

それが許せなかった、一夏がいなければ……と、そういう結論に行き着いたらしい。

ラウラの苦しみも痛いほど分かっている。実はクローンであることも、暗い人生を歩いてきたことも、その、眼帯のことも……。

そして、アメリカに渡る直前のあの出来事も……

そこで俺は……

「あのことは気に止む必要はない」

「そうか」

実は心の中ですごく傷ついているのだろう。しかし俺はあれ以外の選択肢はなかった。選ばざる負えなかった。

あそこでそれ以外の選択肢を選んでいたら、今、俺は幸せなのだろうか。いくら悔やんでも仕方がない。そう自問自答を繰り返していた。

「ラウラ、これだけは言わせてくれ」

「何だ？」

「お前がこれからやろうとしていることは、間違っている」

「………そうか、じゃあ出ていってくれ」

「一夏、正気か？」

「は？」

「いや、おまえ、このハーレムよろしく状態は何だ？」

「へ？」

昼休み、一夏に誘われて鈴と屋上に来たのだが……

篠ノ之さん、オルコットさんがそれぞれ弁当を二つずつ持ってきている。いや、たしかに鈴も酢豚を二つ持ってきているけど、俺にくれるらしいから。どれだけ海外生活が長くても、母国の味は忘れ

られん。

そして、一夏と、三人目の男子、シャルル・デュノアが座っている。

この二人のこの弁当の渡す先は、もちろん一夏。この唐変木はどこまで気付けないんだ？ひょっとしてキスされてもその人が自分を好きだと気付けないのではないだろうか。

IS学園の屋上は、普通の高校の屋上（あぶないから）や、ドイツの兵舎の屋上（敵に狙われるから）のように、上がってはいけないということはない。美しく配置された花壇には季節の花々が咲き誇り、欧州を思わせる石畳が落ち着いている。それぞれ円テーブルにはイスが用意されていて、晴れた日の昼休みともなると女子たちで賑わう。

「いや、天気がいいから屋上で食べようと……」

そういう問題ではなくて、なぜ女子二人の手作り弁当をもらおうとしてるんですか？

「それに、せっかくの昼飯だし、大勢で食ったほうがうまいだろ。それにシャルルは転校してきたばかりで右も左もわからないだろうし」

……もつともな意見を言っているようで、じつは根本的に違っているのが理解できないのだろうか。

「じゃ、俺と鈴はあっちで食べてるから」

「一緒に食べないのか」

「いや、いいよ」

描写なしでは、俺が、鈴と二人っきりになろうとしているように

も見えるが、実際には、女子二人の目が怖かった、というのが、主な理由だ。

少し離れた席に着く俺と鈴、この位置からだあの四人がはっきり見える。

「はい、アンタの分」

タッパーを投げるな。

「おお、うまそうだな」

「そ、今朝作ったのよ。アンタの思い出の品だしね」

最後に中国で食べた料理は酢豚でした。そのため、俺の思い出の品となっています

そんなことより小学校の時食ったあの激マズから進化しているといいんだが。

そして何より、なぜご飯がない？まあ、手は打ってある。

と、おれはカバンからご飯を取り出す。

「あんた、なんで持ってきてんの」

「え？だって鈴、ご飯渡さないだろ。もらおうと思っても金かかるし。過去七回くらいそれで、ご飯なしの苦行の酢豚を食べているし」
小、中学校での鈴の収入の五〇％は、幼なじみからのカツアゲですが、自分の酢豚だけ温めてくるとは卑怯だな。ちょっと鈴のをもらおう。

「おい、鈴」

「……………」

「りーんー!!」

「…ふえっ!!」

「どうした。心ここにあらずって感じだったぞ」
「いや、あれ……」

鈴が指さす先には……

一夏が篠ノ之さんにカップルがすると言われる日本の風習、通称『はい、あーん』をしていた。オルコットさん、頬がひきつっています。

視点を鈴に戻すと、鈴が箸に豚肉を挟んで左手を下に添えて構えていた。なんだ、その、これを食べろつつうのか？

埒があかないので、さっさと……食べた。ハズイが、なんだか少し幸せ。

今度は仕返しをしてやろうと、俺も同じように構える。鈴の頬が真っ赤だ。

その後鈴が……食べた。

何というか、誰にも見られてないのにこの恥ずかしさは一体……

「……」
「……」

気まずい……まあ、この状態で何事もなかったかのように過ごせるのは、地球上で唐変木・オブ・唐変木ズの異名を持つ、織斑一夏ぐらいのものだろう。

「あのさあ」

「ん？」

「あの転校生とはどういう関係なの？」

「……ドイツの部隊で一緒だっただけさ」

あの話はこいつの前では話せない。少なくとも、今は。

そのあと、特に異常もなく、夕食を済まし部屋に戻ってきた。よし、まだ一人部屋だ。どうやらシャルルは一夏の部屋の方らしい。ちなみに、それほど親しくない女子の場合は苗字をさん付けで呼ぶが、男に関しては一律名前の呼び捨てだ。

ところで暇だな、よし。

「コーンニーチワ―」

早速一夏とシャルルの部屋に押しかける。

「おお、お茶だ」

机の上には日本茶。一夏とシャルルが仲良く話をしている。

「突然部屋に押しかけといてそれかよ」

「気にしたら負けだぞ」

俺はもうひとつお茶を入れそれをすする。

「そういえば、鳳さんと秋葉くんって付き合ってるの？」
「ブホッ!!」

本作三回目のお茶の吹き出しシーン。

「な、ゲホツ、なんで」

「いや、今日、屋上で『はい、あーん』って二人でやってるところ見たから」

「……いや、そんな関係ではない、はず」

「その『はず』ってなんだよ」

「いや、何もやましいことはしてないぞ」

そんなことをいきなり言われて、慌てないのは唐変木オブ（以下略）

毎度おなじみ、強引に話を切り替える。困ったときの万能用語

「そういえば一夏っていつも放課後ISの特訓しているんだよな」

「ああ、俺は他のみんなから遅れているから、地道に訓練時間重ねるしかないからな」

「俺も加わっていいか。完全に興味本位なんだが」

「僕もいい？専用機もあるから少しくらい役に立てると思うんだ」

「おお、それはありがたい話だ。ぜひ頼む」

こうして、俺はハーレム状態に浮かれている一夏を地獄に突き落とすことに成功した。

さて、そんなことは一旦置いて、結構な用事があったのを忘れていた。

「一夏一夏、ちょっとお駄賃あげるから、テキトーに飲み物買ってきて」

「おう、何がいいんだ？」

「俺コーラ」

「じゃあ、僕はオレンジを」

「じゃ、行ってくるわ」

さて、一夏も居なくなつたし本題に入るか。

「シャルル、いや、”シャルロット”お前は女だな？」

シャルロットが、ビクリと肩を震わせる。

「いや別にどうこうしようっていうのではないけど、ただ、俺のと覚えてないのが悲しいなって」

「え？」

「シュバアルツェ・ハーゼ所属中佐秋葉咲也、旧姓は李赦鶯」

シャルロットの顔がいきなりびくつく。

「ひよつとして、咲也なの？」

「死んだだとも思ってたのか？」

「いや別にそうじゃないけど、ただ、あそこから生還して来るって難しくない？」

「腐っても軍人なのに」

「フフツ、でも生きててよかった」

「ありがとよ」

また、友と再開するハメになった、まあ、賑やかでいいけど。

少しの進展と多大な憂鬱（後書き）

テスト期間中にかかわらず更新！！しかも二連続。このままでは試験が危うい。

ブルーデイズ

「さてと……」

シャルロットが転校してから5日間が過ぎ、今日は土曜日。IS学園では土曜日の午前は理論学習、午後は自由時間になっている。とはいえ、アリーナが全面開放なのでほとんどの生徒が実習に使う。それは俺も同じで、今日は一夏とシャルロットが手合わせしたあと、IS戦闘に関するレクチャーをしていた。

「一夏がIS戦闘で勝てないのは単純に射撃武器の特性を把握していないからだな」

「でも、咲也にも負けるぞ。」

「それはきつと一夏の零落白夜を咲也が相殺で毎回解除してるからだよ。毎回シールドエネルギー切れで負けてるでしょ」

「というか、一夏の刀って軌道が読み易いんだよ。直線的で直情的だから」

「で、どうすればいいんだ？」

「じゃ、まずシャルロ…シャルル先生」

「うん、まかせて」

危ない、もう少しで本名話すところだった。

「まず、一夏のISは近接格闘オンリーだから、より深く射撃武器イグニッション・ブーストの特性を理解しないと対戦じゃ勝てないよ。とくに一夏の瞬時加速イグニッション・ブーストって直線的だから反応できなくても軌道予測で攻撃できちゃうからね」

「だからシャルルには間合いを詰められるし、咲也には真剣白刃取りをされるのか……」

「真剣白刃取りってあんなに簡単だったかなあ？」

「おまえら、俺が軍人なの忘れてないか？」

ちなみに瞬時加速というのは後部スラスタ翼からエネルギーを放出、それを内部に1度取り込み、圧縮して放出する。その際に得られる慣性エネルギーを利用して爆発的に加速する、近接格闘型にとっては基本の技だ。

さっきも言ったように土曜の午後はアリーナが全面開放されているので、ここ第三アリーナでも多くの生徒がところ狭しと訓練に励んでいる。しかし、学園で二人しかない男子と、自称男子が一人いるためか、第三アリーナは使用希望者が続出。かなり過密な状態だった。

「一夏のISって俺のと同じで後付武装イコライザがないんだよな」

「ああ、何回か調べてもらったんだけど、拡張領域パススロットが空いてないらしい。だから量子変換は無理だって言われた」

「俺もなんだが、それはワンオフ・アビリティに容量を使っているからだ」

「ワンオフ・アビリティって言うところ……えーとなんだっけ？」

もつと勉強しろ。

「言葉通り、唯一仕様ワンオフの特殊能力だよ。各ISが操縦者が最高状態の相性になったとき自然発生する能力のこと。まあ、咲也みたいに容量をすべて唯一仕様ワンオフに割り振っていると多様性が増すらしいけどね」

「そんな機体紫雲以外なけどな」

『紫雲』の唯一仕様は『相殺』だが、その延長として『剛力突破』

がある。実は、さらに延長もあるがそれはそのうち紹介してやるさ。しかし、こういう説明がスラスラ出てくるあたり、シャルロットがいかに優秀かがよくわかる

「でも、普通は第二形態から発現するんだよ。それでも発言しない機体の方が圧倒的に多いから、それ以外の特殊能力を複数の人間が使えるようにしたのが第三世代型IS。オルコットさんのブルーティアーズと凰さんの衝撃砲がそうだよ」

「なるほど。それで白式の唯一仕様ってやっぱり『零落白夜』なのか？」

エネルギー性質のものであればそれがなんであれ無効化・消滅させる白式最大の攻撃能力、それが『零落白夜』。しかしその発動には自身のシールドエネルギー、つまりは自分のライフを削るという呪われた武器仕様であり、文字通り諸刃の刃なのだ。

「しかし、その能力って教官の——初代『ブリュンヒルデ』が使っていたISと同じだよな」

「まあ姉弟だからとかそんな理由じゃないのか？」

そんな理由があつてたまるか

「無理だ、操縦者の相性が問題だから、いくら再現しようと思っても意図的にできるもんじゃねえんだよ」

「そうか。でもまあ、今は考えても仕方がないだろうし、その事は置いておこうぜ」

「そうだな。よし、シャルル、適当に一夏に射撃訓練をしてあげてくれ」

「うん」

そういつと、シャルロットは55口径アサルトライフル『ヴェン
ト』を一夏に渡した。

「え？他のやつの装備って使えないんじゃないのか：

だから勉強しろ。

「使用者が仕様アンロック許諾すれば登録してある人全員が使えるんだよ。――
うん、今一夏と白式に使用許諾を発行したから、試しに撃つてみ
て」

「お、おう」

一夏が妙にどきまぎしながら、初めての銃器に手を触れる

「か、構えはこうでいいのか？」

「えっと……脇を締めて。それと左腕はこっち。わかる？」

シャルロットと一夏はそれなりに身長差はあるものの、ISの特性で浮いていることから一夏を自由な動きで誘導する。それはいいが、おまえは男のふりをしている女なんだから、少し自重しろ、というか、シャルロットも一夏に惚れたのか？

「シャルロット、たぶん一夏のISにセンター・リンクはないぞ」

「そうなの？じゃあ、目測だね」

初心者には難易度高いぞ。

「じゃあ行くぞ」

「うん、とりあえず撃つだけでもだいぶ違つと思うよ」

「そうか」

一夏がやつぱりどきまぎしながら恐る恐る引き金に指をかけて…
撃った。

バン！！

「うお！？」

一夏、驚いた時の声をもうちよつと考える。

「どう？」

「お、おう。なんかあれだな。とりあえず『速い』って感想だ」

「わかったか。一夏の瞬時加速も速いけど、弾丸はその面積が小さい分より速い。だから、軌道予測さえ合っていれば簡単に命中させられるし、外れても牽制になる。俺達近接型はそれも踏まえた上で、相手に突っ込まなきゃならない」

「だから簡単に間合いが開くし、続けて攻撃されるのか……」
「そうだ」

「だからそうだと私が何回説明したと……」

「ってそれすらわかってなかったわけ？はあ、ほんとにバカね」

「私はてつきりわかった上であんな無茶な戦い方をしているものと思っただけ……」

どうでもいいが、今までの自称一夏の専属コーチ達には教え方を教えなくてはならない様だな。

「あ、そのまま続けて。一マガジン使い切っていいよ」
「おう、サンキュ」

一夏がさつきよりは落ち着いて2発3発と空撃ちする。さすが教官の弟、飲み込みが速い。

「そういえばシャルルのISってリヴァイヴなんだよな」

「うん、そうだよ。――あ、腕が離れてきているから、ちゃんと一回ごとに脇を締めて」

「お、おう。……こうか？」

「オーケーだよ。あと、なるべく銃身を移動させて視線の延長線上に置いたほうがいいね。首を傾けて撃つと、とっさに反応できないよ」

そんなふうに指導してもらっている一夏の鼻の下が少し伸びている気がするのはい気のせいだろうか。

「で、そのISなんだけど、山田先生が操縦していたのとはだいぶ違うように見えるんだが」

今更だが、山田先生というのは、副担任の子犬のような先生のことである。ちなみに、シャルロットのISと山田先生のISについては原作を見てくれ。説明するのがめんどい。

「ああ、僕のは専用機だからかなりいいじつであるよ。正式にはこの子の名前は『ラファーフ・リヴァイヴ・カスタム？』。基本装備を^{プリセット}いくつか外して、そのうえで拡張領域を倍にしてある」

「倍！？そりやすごいな……ちょっと分けて欲しいくらいだ」

「あはは。あげられたらいいんだけどね。そんなカスタム機だから今量子変換してある装備だけでも二十くらいあるよ」

「うーん、ちよつとした火薬庫みたいだな」

……ちよつとしたでは済まされんがな。

まあ、大体ISの装備というのは普通5つくらい、多くても8つくらいである。なぜかというところ、そんなに装備を積んでいても同時には使えないし、何より呼出のウェイトを考えると、多くインストールしてあっても意味がないのだ。

それはわかった上でのこのカスタム仕様だから、シャルロットには何か特殊な技能があるのかもしれない。

「ねえ、ちょっとあれ……」

「ウソっ、ドイツの第三世代型だ」

「まだ本国でのトライアル段階だって聞いたけど……」

そいつの第三世代型と言えはあいつしかない。というかあいつしか考えられない。

あいつは、間違いを犯すつもりでここに来ている。そこまでしてやり遂げたいことなんだろうが……

オープンチャンネル
すぐに開放回線でラウラに声を飛ばす。

「おい!!」

「何ですか。隊長」

「ダメエ、本当にやんのか？」

「私は、その為にここに来ました。目的を果たすためなら……隊長をも裏切るつもりです」

「……そうか、じゃあ俺も容赦しねえぞ」

「どうぞ」

刹那、左肩に装備された大型の実弾砲が火を噴いた。

「!」

ゴガギンツ！！

「……こんな密集空間でいきなり戦闘を始めようとするなんて、ドイツの人は沸点が低いんだね。ビールだけでなく頭もホットなのかな？」

「貴様……」

俺が避けた実弾の先は一夏が、そこに横合いからシャルロットがシールドで実弾を弾き、同時に右腕に61口径アサルトカノン『ガラム』を展開してラウラに向ける。

「フランスの第二世代^{アンティーク}ごときで私の前に立ちふさがるとはな」

「未だに量産化の目処が立たないドイツの第三世代^{ルキ}型よりは動けるだろうからね」

俺はシャルロットが割って入ったことにも驚いていたが、それ以上で装備呼び出しの速さに凄みを感じていた。

通常1〜2秒ほどかかる量子構成をほとんど一瞬で、それも照準を合わせると同時に行なっていた——なるほど、これができるから大容量拡張領域なのか。これなら事前に呼び出しを行わなくても戦闘状態に合わせて戦闘状況に合わせて最適な武器を使用できる。同時に、弾薬の供給も高速で可能ということだろう。つまり持久戦に圧倒的なアドバンテージを持っている。そして相手の装備を見てから自分の装備を変更できるという強みがある。

シャルロットが代表候補生であることと、その専用機が量産型のカスタム機であること、その両方の理由に納得がいった。

『その生徒！何をやっている！学年とクラス、出席番号を言え！』

突然アリーナにスピーカーからの声が響く。騒ぎを聞きつけてやってきた担当の教師だろう。

「……ふん、今日は引こう」

横やりを何度も入れられて興が削がれたのか、ラウラはあっさり戦闘態勢を解除してアリーナゲートを去っていく。その無効ではおそらく教師が怒り心頭で待っているだろうが、あのラウラの性格からして無視してしまうだろう。

「一夏、大丈夫？」

「あ、ああ。助かったよ」

つい数秒前までラウラと退治していた鋭い眼差しはもうない。いつものように人懐っこいシャルロットが、一夏の心配をする。……お前やっぱり一夏に惚れただろ。

「今日はもうあがるつか。四時を過ぎたし、どのみちもうアリーナの閉館時間だしね」

「おう、そうだな。あ、銃サンキュ。色々と参考になった」

「そう、それなら良かった」

十年前の男女ではあまりかわさなかった会話だ。物騒さについて。

「えっと……じゃあ、先に着替えて戻ってて」

うん、お前女子だもんね！一夏！なんでって顔しないで早く行くよ！

「たまには一緒に着替えようぜ」

あ、バカ。

「い、イヤ」

うんそうだな。一刻も早く逃げるシャルロット。

「つれないこと言うなよ」

おいテメエ男子でもアウトなラインだぞコラア。

「つれないっていうか、どうして一夏は僕と着替えたいの？」

お、いつてやれシャルロット。

「というかどうしてシャルルは俺と着替えたがらないんだ？」

やっぱそう来ますよね。当たり前だよな。

「どうしてって……その、恥ずかしいから」

おい、シャルロット。核心に近付いて来てるぞ。

「慣れればだいじょうイタタタタ」

あまりにもまずかったため、一夏の耳を引っ張って更衣室に強制連行。同姓でもアウトな領域に突入してただろ。

「しかしまあ、贅沢っちゃあ贅沢だな」

「おう、そうだな」

ガラーンとした更衣室に男子二人だけ。一夏がベンチに腰掛け、俺は、着替え始める。

「はー、風呂はいりてえ……」

「ん、自宅に帰れば？」

「あそこは千冬姉がいるし、そもそも休日しか入れない上に、時間が日中に限定している。よって却下!!」

「じゃ、銭湯は？」

「その手があった!!」

っていつか今まで気づかなかったのかよ。
そうこうしているうちに一夏も着替え終わった。

「あのー男子勢は全員いますかー？」

「はい。織斑と秋葉だけいます」

ドア越しに呼んでいる声が聞こえる。声の主はとうやら山田先生
のようだ。

「入っても大丈夫ですかー？まだ着替え中だったりしますー？」

とりあえず語尾の『ー』だけ気になる。

「ああいえ、大丈夫ですよ。着替えは済んでいます」

「そうですかー。それじゃあ失礼しますねー」

バシユツとドアが開いて山田先生が入ってくる。圧縮空気の閉開
音は今日もカッコいい。

「デュノア君は一緒ではないんですか？今日は織斑くんたちと実習
しているって聞いてましたけど」

「あ、まだアリーナの方にいます。もうピットに戻ってきたかもし
れませんが、どうかしました？大事な話なら呼んできますけど」

「ああ、いえ、そんなに大事な話でもないですから、秋葉ちゃんと織
斑君から伝えておいてください。ええとですね、今月下旬から大浴
場が使えるようになります。結局時間帯別になると色々と問題が起
きそうだったので、男子は週に二回の使用日を設けることにしまし
た」

「「本当ですかー!!」」

「嬉しいです助かりますありがとうございます山田先生」
「おいお前先生の手握って何やってんだ。」

「一夏、何してるの？」

「シャルロットがナイスタイミングではいつてきた！！やったぜ！！
「まだ更衣室にいたんだ。それで先生の手を握って何をしているの？」

「あ、いや何でもない」

「一夏がぱつと握っていた手を離す。」

「一夏、先に戻っててっていたよね」

「お、おうすまん」

「一夏って将来絶対女房の尻にしかれるタイプだよな。」

「喜ベシャルル。今月下旬から大浴場が使えるらしいぞ！」

「そう」

「うんそうだよな。当たり前のことだが、現在シャルロットはご機嫌ナナメだ。」

「あ、そういうえば織斑くんにはもう一件用事があるんです。ちょっと書いて欲しい書類があるんで、職員室まで来てもらえますか？白式の正式な登録に関する書類なので、ちょっと枚数が多いんですけど」

「わかりました。——じゃあ、シャルル、ちょっと長くなりそうだから今日は先にシャワー使っててくれよ」

「うんわかった」

「じゃ山田先生、行きましょうか」

「二人が消えたのを確認してから俺も更衣室を退散する。
ずっと隠しておくことはできなくても、多分あいつならそれを分かってくれる。」

ブルーデイズ（後書き）

疲労困憊、つかれた。

秘密（前書き）

地震に動揺しまくったのと、もう一個小説を書き始めたのが影響して、遅くなりました。すいませんでした

秘密

現在食堂に向かう途中、一夏が篠ノ之さんとオルコットさんに両腕を組まれている。相変わらずハーレムやっているようだ。

俺はというと……前の二人に感化されたのか鈴が腕を組んできている。胸がないといえどもこれはおそらく公開羞恥プレイに値するだろう。

「なあ、鈴。なんで腕組んできてんだ？」

「なに、アンタ嫌なの？」

そんな顔真つ赤にして上目遣いに訊いてくるな。『うん』と言いつライだろ。と、いうかそんなに嫌じゃないのがまたなんとも……

「と、いうかなんで？」

「……理由言わなくちゃけない？」

だから顔真つ赤にして聞くな。断りづらい。

結局食堂までそのままズルズルつきあわされるのだった。

「で、結局バレたんだな」

「そつ、しかも裸見られたんだ……」

赤面しつつ語るな。どうして俺の周りの女子はこう、大雑把なんだ。と、いうか一夏気付け。

「一夏ったら、僕が女だってことわかった途端いきなり胸見るんだ

よ

「心配するな。それで見ない男子の方が少ない」

「え？ そうなの」

「例えば、鈴の胸がいきなりCカップになったりしたらついそ
っちの方を向いてしまうだろ。要は、そういうことだ」

「なるほど。って、どうして咲也は僕の胸の大きさを知ってるの！
？」

「気にしたら負けだぞ」

「むっ」

ほっぺをふくらませるな。一夏の前でやれ。

「ひよっとして、咲也ってかなりのおせっかい？」

「そんなことはないぞ」

あくまであのハーレム野郎の修羅場を期待しているだけです。

「で、今日は僕にも『はい、あーん』をしてもらったんだ」

なるほど。そうやって女をたらしこんでいくんだな。

「ところで、おまえ、一夏に惚れてんの？」

「ふえ！？」

「どっからそんな声出してんだよ……」

「うっ、やっぱりおかしい？」

「いや、好きな女だったらむしろ可愛さに内心悶えるかも」

「ふうん……って咲也は僕をどこに誘導してるの！」

「で、あの唐変木が好きなんだな？」

「唐変木って……」

「間違いではないだろ」

「まあそつだけど……」

「あの唐変木を乗り越えるのはかなり大変だぞ」

「はあ、どうして一夏は意識したりしないのかなあ」

「そりゃああれだ。もともと唐変木なのが篠ノ之さんやオルコットさんに誘惑され続けているうちに女への免疫が出来て、ちよつとやそつとじゃ響かなくなっているんじゃない？」

「むう、前途多難……」

まあ、そういうことだ。一夏はは内心じゃあなにかされるたびに身悶えしてるんだろうけど面白くないのでそれは黙っておく。

「ああ、そつだ僕、咲也に言わなきゃならないことがあつたんだ」

「何だ？」

「なんかあつたつけ？」

「あの、その」

人差し指をつんつんさせたり絡めさせたりしているが、早くしろ。

「えと、僕、咲也のこと好きだつたんだよ？今は違うけど」

……とりあえず何故疑問形なのだろうか。俺になにか返事が欲しいのか？まあ。過去形だったからいいか。というか全然気付かなかった。

「ほら、咲也も結構鈍感なんだよ」

たしかに思い当たるフシはいくつかあるが……

「だからね、咲也に熱心にアピールしてる人もいるってことを知って欲しかったんだよ」

そう言つとシャルロットは、俺の部屋から出ていった。

「そ、それは本当ですか？」

月曜の朝の教室。あの噂で持ちきりだ。そしてオルコットさん食いつきすぎだ。

「本当だつてば！この噂、学園中で持ちきりなのよ？月末の学年別トーナメントで優勝したら織斑君と交際でき――」

「俺がどうしたつて？」

「「「きゃああっ！？」」「」」

ナイスタイミングー夏（隣はシャルロット男装バージョン）。そのまま死んでしまえ。この幸せ者が。

「で、何の話だつたんだ？俺の名前が出ていたみたいだけど」

「う、うんそうだつたっけ？」

「さ、さあ、どうだつたかしら？」

ちなみに最初がクラスの女子で、あとがオルコットさん。

「そ、それでは私ももうすぐHRですし、席につきませんと」

よそよそしすぎる、本当に隠す気あるのかわからない。

「……………なんなんだ？」

「……………さあ？」

わかつてるくせにわざと知らないふりをするをするシャルロットを傍観した後、俺は窓際の一番端の席に座っている、かつての部隊の同僚を見る。

この時全く気付かなかったんだが、実は、教室の端で篠ノ之さんがワナワナ震えていた。

学園内に男子が使えるトイレが3つしかないため、一夏は中距離走を開始していた。ちなみに咲也は先にいった。

（しかし考えようによつてはシャルルが一番きついのか、女子なのに男子トイレまで行かなければいけないわけで、つまり——っていかん、やめよう。何も考えない方がいいような気がしてきた）

大体のんびりはしてられないのだ。次の授業はISの格闘技脳に関する基礎知識と応用なのだ。一夏にとって死活問題になりうる授業なのである。

「なぜこんなところで生徒などやっているのですか！」

「はー……………」

一夏は耳から入ってきたその音に少し注意を向ける。その声が咲也とラウラのような声だったからである。

「何度もいわせんな。俺には俺の役割がある」

「このような極東の地でなんの役目があるというのですか！」

あの氷の転校生ことラウラが声を荒らげて、咲也の今の状態について不満をぶつけているのだった。

「お願いします。隊長。我がドイツで再びご指導を。ここではあなたの能力は半分も生かされていません」

「へえ」

「だいたい、まだ、”ながつき長月”を発動してないそうですね。本気の十分の一も出してないじゃないんですか」

一夏は、咲也が『長月』という言葉聞いた途端顔がわずかに陰しくなったのを見逃さなかった。

「そこまでしておけよ」

「っ……！」

一夏が聞いたことのないような凄みのある声が飛んだ。さすがのラウラも、その声に含まれる覇気にすくんでしまった。

「少し見ない間に偉くなったな。上官に逆らうほどお前は偉かったっけか？」

「……私をいつまで傷つければ済むんですか？」

「……」

咲也は少し心の中で焦った。それは触れてはいけないこと。そして、ずっと隠しておくべきこと。

「本当にどうしたの……咲也」

「……一晩考え、二晩考え、三晩考え、俺はあれ以外の選択しかできなかったんだぞ？」

「それでもまだ——」

「すまん、無理だ」

それは多分ほんとうは違うから。
そんなことが昨夜の心の中に浮かんた。

「隊長……」

「早く行け。授業に遅れるぞ」

「……はい」

一夏は見つからなかったことに心から感謝してその場をさるうとしたが。

「ところで、その男子。盗み聞きはマズイぞ」

「ゲッ!!」

「大丈夫だ。ラウラはもういないぞ」

「ところでお前。昔なんかラウラとあったの？」

「まあ、ちよつとな。ところで本当に授業遅れるぞ」

「うわっやばっ!」

「じゃ、走るか」

「すまん、俺トイレ」

「遅れないようにしろよ。多分無理だけど」

「くそおっ」

二人の影はそこから分かれていった。

秘密（後書き）

比較的速い時間に更新してみたぜ。さて、新単語”長月”とは？とか伏線を張ってみました。全部設定決めてるから心配すんなよ。

レッドスイッチ（前書き）

オリキャラが一気に二人登場だぜ!!

レッドスイッチ

さて、いつもの放課後の練習だぜ！！場所は第三アリーナ。

「さてと」

「そついや、咲也のISってまだ二回しか見てないんだけど」

ラウラがいきなり発砲した時と、鈴とオルコットさんと戦った時だな。

「なんだ？みたいのか」

「いや、なんだか装備が弱すぎるなと」

「いや、こんなもんだろ。相殺もあるし」

「で、”長月”って何だ？」

ゲツ、こいつあん時に聞いたのかよ。

「んと、まあ秘密兵器みたいなもんだな（冷や汗をかきながら）」

「じゃあ、なんで使わないんだ？」

「まあ、ちよつと副作用が激しくて……」

「ふーん」

よし、一夏は納得してくれたようだ。出来ればこんなモンつかいたくないからな。

「ところで咲也」

「ん？」

「あの二人をどうやって止めるか考えようや」

「ありゃー」

なんだか向こうの方では、IS展開状態で鈴とオルコットさんが火花を散らしている。

「ちょうどいい機会だし、この前の実習のことも含めてどちらが強いかはつきりさせとくつても悪くないわね」

「あら、珍しく意見が一致しましたわ。どちらの方がより強く優雅であるか、この場ではつきりさせておこうではありませんか」

オルコットさんは一夏との交際のためだけど、鈴ってなんかあつたつけ？まあいいや。二人ともメインウェポン取り出しちゃったし。

「では――」

――と、いきなり声を遮って超音速の砲弾が飛来する。

「――!?」

緊急回避のあと、鈴とオルコットさんはそろって砲弾が飛んできた方向を見る。そこにはあの漆黒のISがたたずんでいた。

機体名『シュヴァルツェア・レーゲン』、登録操縦者――

「ラウラ……」

本当に来たか……

「……どういうつもり？いきなりぶつ放すなんて言い度胸してるじゃない」

とん、と連結した【双天牙月】を肩に預けながら、鈴は衝撃砲を準戦闘状態へとシフトさせる。

「中国の【甲龍】にイギリスの【ブルーティアーズ】か。……ふん、データで見た時の方がまだ強そうではあったな。ましてや、【白式】など戦うに値しない」

いきなりの挑発的な物言いに、鈴とオルコットさんの両方が口元をひきつらせ、一夏の顔が陰しくなる

「何？やるの？わざわざドイツくん dari からやってきてボコられたいなんて大したマゾっぷりね。それともじヤガイモ農場ではそういうのが流行ってんの？」

「あらあら鈴さん、こちらの方はどうも言語をお持ちでないようですから、あまりいじめるのはかわいそうですね？犬だってまだワンといますのに」

ラウラの全てを見下すような目付きに並々ならぬ不快感を抱いた二人は、それでもどうにか怒りのはけ口を言葉に見出そうとする。というか、よくそんな罵倒が出てくるなあ。ていうか止めたほうがいいのか？

「はっ……。二人がかりで量産機に負ける程度の力量しか持たぬものが専用機持ちとわな。余程の人材不足と見える。数くらいしか能のない国と、古いだけ取り柄の国はな」

ぶちっ——！

俺を含む約三人の頭から何かが切れる音がする。

前言を撤回して、とりあえずぶちのめす（お忘れの方も多いと思います）が咲也は中国人です）。

「——今なんていった？アタシの耳にはどうぞ好きなだけ殴ってく

「ださいって聞こえたけど」

「場にはいない人間の侮辱までするとは、同じ欧州連合として恥ずかしいですわ」

獲物を握り締める手にきつく力を込める二人。それを冷やかな視線で流すと、俺の方を向いてこういつてきた。

「あ、隊長は参加しないでくださいね」

ラウラはそう言つと、全く無関係の人にレールカノンを向け引き金を引く。

「やべえ!!」

俺はISを起動、同時に変換を行ないシールドエネルギーを消費し、EXエネルギーを増やし、脚部に【剛力突破】を発動させ、瞬時加速を行う。これが紫雲の中でもっとも速い動き方だ。レーザーより早くその場にたどり着き相殺でレーザーを消す。

「だけど、エネルギー消費が激しいんだよな」

あつという間に紫雲のシールドエネルギーがなくなり動けなくなる。

銃口を向けられた女の子ふたり組が俺の方を驚いたように見つめていたが、鈴+オルコットさん+一夏の戦闘が始まると

「ねえ、アンタがウチらをかばってくれたんよねえ。で、要はあの娘が悪者で倒したほうがいいってことなん？」

金髪の方の人に関西弁で尋ねられた。

よく見ると、二人とも専用機持ちで金髪の娘は黒と黄色のストライプのISで大きなハリセンを握っている。

そして、さつきから黙っている深緑のISを持った女の子は盾を担ぎながら、

「で、あなたは助けて欲しいの?」

と訪ねてきた。

「……ああ、助けてくれ。今はあんなんだけど根はとってもいい奴なんだ」

「よっしゃ、決まりで」

「ええ、こうなったらもう止めるしか方法はないものね」

「ありがとう。俺は一組の秋葉咲也だ」

「ウチは二組の風井美波かざいみなみっていうんや、美波でええで」

「二組のローラ・クロムウエル、スイスの代表候補生よ。私もローラでいいわ」

「んじゃ、行くで」

美波とローラは同時に動き出す。

「箒さん、今日の特訓どこだっけ?」

「ああ、確か第三アリーナだ」

今日も一夏の特訓に付き合うため箒とシャルロットはアリーナに向かっていたが、アリーナに近づくにつれなんだか慌しくなってくる。

「何か問題でも起きているのか？」

「わからないね、こっちで先に様子を見ていく？」

そう言つてシャルロットは観客席のゲートを指す。普通にピットに入るより早く様子を見ることが出来るからだ。

「誰かが模擬戦をしているみたいだね。でもそれにしては様子が――」

ドゴオンッ！

「！？」

二人が爆発に驚いて視線を向けると、その煙を切り裂くように影が飛び出してくるのがみえた。

「鈴！セシリア！」

特殊なエネルギーシールドで隔離されたステージからこちらに爆発が及ぶことはないが、同時にこちら側の声も聞こえない。

二人は苦い表情のまま爆発の中心部へと視線を向ける。そこにはハリセンを持った黄色と黒のストライプのISがラウラを吹き飛ばしている光景があった。

そしてその後ろには巨大な盾を持った深緑のISに乗っている黒髪の女がラウラに冷やかな視線を送っている。

よく見ると鈴とセシリアのISはかなりダメージを受けている。機体は所々が損傷しISアーマーの一部は完全に失われている。

そして一夏。ISアーマーのほとんどが損傷しほぼボロボロ。それでもしっかり立って剣を握り締めている。

と、二人は一人、この場にいないアイツを探し二人同時に見つける。

咲也は、ISの両手をエネルギーシールドに押し付けていた。

「あれは……」

「……多分エネルギーを吸収しているんだと思うよ」

アリーナの壁面にあるエネルギーシールドは、もちろんエネルギーで構成されている。咲也はそれを吸収することで、形勢逆転を狙っているらしい。

そんな時、一夏をかばうようにして、セシリアと鈴が前に出る。

「くっ!!」

鈴が衝撃砲を発射。セシリアがスターライトmk?を使いラウラを飛ばそうとするが。

「無駄だ」

ラウラが右手を突き出すと衝撃砲は跡形もなく消え去り、弾丸はラウラの実弾装備によって爆散する。

その後ろから美波がハリセンではたこうとするが。それも止められる。

と、ここで咲也が動き出す。『一夏』に向かって。そして加速し

……一夏の近くまで行きこう言う

「いいか、俺が集めたエネルギーを無駄にするな。もう時期先生も来る。それまで押さえ込め」

と、そう言つて、一夏の手を自分と手に触れさせ。

「え？エネルギー全回復？」

「おう、俺はもう参加できないからがんばれよ」

エネルギーを全部渡し終えた咲也はISを解除し、地面に降りた。

（咲也の分まで頑張らなくちゃならねえ。絶対押さえ込むぞ）

「ふん、もう終わりか？」

「いいや。まださ」

（零落白夜、発動！！）

雪片式型が赤く輝く。そのまま、一夏は瞬時加速し……何者かが割つて入った。

「遅いですよ、教官」

「せやな、どう考えても対応が遅すぎやねん」

「ああすまん。ちょっと楽しそうな模擬戦だったからな」

その影は予想外の人物だった。しかもその姿は普段と同じスーツ姿で、ISどころかISスーツでさえ装着していない。けれどその手に持っているのはIS用近接ブレードであり、一七〇センチはある長大なそれをISの補佐なしで軽々と扱っている。そのうえでい

まの横やりなのだから、つくづく常人離れしている。

「模擬戦をやるのは構わん。――が、アリーナのバリアーまで破壊する自体になられては教師としても黙認しかねる。この戦いの決着は学年別トーナメントでつけてもらおうか」

ちなみにバリアーの破壊というのは、咲也のエネルギー吸収のことだ。

「教官がそうおっしゃるなら」

素直に頷いてラウラはISの装着状態を解除する。アーマーが光の粒子へと変換され、弾けて消えた。

「織斑、秋葉、お前たちもそれでいいな？」

「あ、ああ」

ついつい素で答えてしまっ一夏。

「教師には『はい』と答える。馬鹿者」

「は、はい」

「俺もそれで構いません」

返事し返す一夏に咲也も追従する。その言葉を聞いて千冬は改めてアリーナ内の全ての生徒に向けて言った。

「では、学年別トーナメントまで私闘の一切を禁止する。解散!!」

パンッ!と千冬が強く手を叩く。それはまるで銃声のように鋭く響いた。

レッドスイッチ（後書き）

というわけで、関西弁少女と、冷静少女が仲間入りしました。ます
ます胡散臭くなってきましたねえ

オリキャラ紹介2（前書き）

ついにオリジナルヒロインが来ましたよ。

オリキャラ紹介2

風井美波 かざいみなみ

大阪府から来たIS操縦者。性格とかすごく大阪っぽい。情にとてつもなく熱くそして真面目。アメを常時持ち歩いている。金髪で髪をシュシュでまとめてそのまま垂らしている。想像できないやつは四国四兄弟で検索して、大阪さんを見つけ出せ。そんな感じた。専用ISは阪神四〇号

阪神四〇号

攻撃特化の第三世代IS。大阪の町工場の人が協力して作った。防御は特に考えていない。武器が六甲嵐しかない、などの弱点が多数存在するが、そんなことは知らないフリをするらしい。カラーリングは黄色と黒のストライプ。待機状態は黄色いシュシュ

六甲嵐 ろくけいあらし

ハリセンの名称。IS用のハリセンで攻撃力はもちろん叩いた時の音の心地よさも考えられている。

大車輪

単一使用能力。二〇秒くらい攻撃力一〇〇倍くらいになるが、代わりに一分くらい動けなくなる。

ローラ・クロムウエル

スイスの代表候補生。すごく冷静で現実的な思考回路を持っている。マイペースで他人のマイペースも認めるのでそんなに嫌われない。黒髪ショート。専用ISはララバイカスタム？

ララバイカスタム？

かなりマイナーなスイスの企業が作った第三世代型ISを改造しまくってできた完全防御特化IS。装備が全能イージスの盾しかない。待機状態は首から下げてるプレート。

イージス 全能の盾

基本何でも防ぐ。とにかく向いてる方向だったら何でも防げる。大小にかかわらず。ただし、大きすぎると盾を乗り越えてくる。また、全能の盾自身の待機状態があり、一回小さくしてすぐに元に戻せる。

セルイージス

単一使用能力。全能の盾の大きさ、形、形態が自由にかえられる。よって、死角なしになるが、一分くらいしか持たない。

オリキャラ紹介2（後書き）

作者「やっと紹介できた」

美波「ていうかなんでここでいきなりオリキャラやねん」

ローラ「作者の気がしないわ」

作者「いやー実は昨日までおまえら存在しなかったんだよね」

美波 ローラ「は？」

作者「全然考えてなかったの」

美波「つまり、今日になっていきなりヒロインを二人投下したつちゆうことなん？」

作者「まあ、そういうことになるな」

美波 ローラ「……………」

問題点など端からなかったふりをしてこの物語は続きます。

そしてそれぞれは……（前書き）

絶望新聞

3、4話とテスト期間に連続更新した作者の点数は案の定壊滅的。そんな絶望のまっただ中にいる作者に取材をしてきました。

記者「テスト、どうでした」

作者「まあ、普通に他の教科は取れていたんですが、英語が壊滅的でした」

記者「ところで、放置している小説の方はどうするんですか」

作者「この話が一段落ついたら書き始めるつもりです。まあ、超鈍足で更新はしますけど」

記者「ところで、放置しているブログは」

作者「最近ネタがないんですよ」

記者「ところで放置している、ツイッターは」

作者「最近ネタがないんですよ」

記者「ところで最近放置しているオンラインゲームは」

作者「退会したから大丈夫だと思う」

記者「ところでとても飽きっぱいのに律儀に返事を返しているメールは」

作者「ここ一週間だれもしてこないけどね」

問題点などありません

そしてそれぞれは……

「はあ……お前ラウラの標的が自分だってことぐらい知ってただろ」
「すまん……」

「途中でエネルギー補充したからダメージレベルBで済んだけどさあ」

「誠に申し訳ない」

場所は保健室。時間は第三アリーナの一件から一時間が経過していた。ベットの上では打撲の治療を受けて包帯の巻かれた一夏が申し訳なさそうにしている。

「でもまあこの分じゃ、学年別トーナメントは問題ないよ」

看病に来ていたシャルロットもそう言う。

「そうか、安心した」

「それから、ちゃんとこいつらにも感謝しなさい」

俺の横で鈴と小競り合いしている美波と、俺の後ろからヒョッコリ顔を出しているローラに謝るよう一夏に言う。

「本当に済まない」

「ああ、かまへんねん。困ったときはお互い様って言うやん」

「私もよ。多分あなたが最後に突入してなかったら私たちが死んだところだったわ」

「でも、自分ほんまに弱いなあ」

「同感よ」

「う、」

核心を突かれて、一夏がうめき声を上げる。これがキャラ崩壊だ。

「しかし、セシリアや箒やシャルルはどうしたんだ？ここにいないけど」

「ああそれなら——」

ドドドドドドドドッ……！

「な、なんだ？何の音だ？」

地響きにも聞こえるそれは間違いなく廊下から響いてきている。
ここから導き出される結果は

「おい！隠れるぞ！」

「え？なんでやねん？」

「いいから急げ！！」

超特急でトイレにローラと美波と鈴と俺は隠れる。さすがIS学園のトイレ（男女共用）、保健室用といえど広い。俺はドアの隙間から外を確認する。

そのすぐあとドカーン！！とドアが吹き飛ぶ。……ホントだよ？
ドアが吹き飛ぶ光景を目にしたのは東さんがドイツに襲撃したとき以来だな。というかあの人も変わんないよね。

「織斑君！」

「デュノア君！」

入ってきたなんてもんじゃない。まるで川の流れのようになだれ

込んできた。人口密度が一気に上昇する。トイレに隠れてなかったらまさにスシヅメになっていた。しかも一夏とシャロットを見つめるなり一斉に取り囲み、まるでバーゲンセールを取り合いがごとく手を伸ばしてきたのである。……見つからない様にドアを閉めなければ。

と、扉を締めて後ろを振り向いてみると

「えーと、何をするつもりなん？」

「は？」

「年頃の男がトイレに女を連れ込む……」

「へ？」

「まさかサク……」

「ちよつとおまえら、ものすごい誤解なのが気づいてなのかよ!!」

ヤバッ、

「え？今秋葉くんの声が聞こえなかった？」

「ウソ、じゃあ、この近くにいてることね」

ドアを破壊するほどの力だ、ここが見つかったらひとたりもないだろう。

「わかったか」

「それならそれと早く言つてよ」

「てつきりまずいことするんかと思つたやんか」

「脅かさないで……」

感謝の言葉がひとつもねえ。

バラバラバラ、と保健室から退陣していく過激派達。正直怖え。

全員退去したことを確認してからトイレを出る。

そこには、さっきまでの二人に加えて、オルコットさんと篤さんが帰ってきていた。

「咲也ズルイぞ」

「自分の身は自分で守ろうって習わなかったか？」

「俺、怪我人なんだぞ！」

「で、どうするんだ」

学年別トーナメントは、ペアで参加することが必須となったため
急いで組を作らなければならないのだ。

「ああ、俺はシャルルと組むことにしたよ」

一夏にしては大変良い判断だ。シャルロットが女ってバレないかな。
らな。

「クラスメイトとして私と組んでくださいませんか」

「いや、幼なじみの私と組め」

「ダメだぜ。（おまえらで取り合いになったら一夏にゲンメツされると思うんだ）」

目でメッセージを送ってみる。

「うつ、ぐっ……！わ、わかりました……！」

「不本意ですが……非常に、非常にっ！不本意ですが！一夏さんの
のペアは辞退させていただきます」

一夏、キョトンとしても無駄だぜ。

「と、ところで、サクは誰と組むの？」

「んー……。全然考えてないな。おまえらは？」

「ウチはもちろんローラと組むで。というか、全然防御装備付いてないからローラと組まんと負けんねん」

そっぴやローラの【ラライカスタム？】は防御特化機体だったな。

「ア、アタシは全然決めてないのよ！」

どうして若干挙動不審気味に、しかも、語尾を強くして話すのだから。

「じゃあ、鈴でいいや」

「いいやって……」

「だって優勝そんなに狙ってないし」

優勝の景品は無いし、いや、強いて言うなら一夏との交際だけど、そんなもん要らんし。

「とりあえずサクの気がどうであろうと、優勝を狙うわよ！」

はあ……。まあ、こいつは勝負事になると気合が入るし、そんなもんなんだろうなとか思いながらゆっくり聞いていたんだが、

「じゃあ、ウチらと練習する？」

「そっね、どうせいつかはぶつかるんだし、一緒に練習したほうがいいかもしれないわね」

「へ？ああ、うん……いやでもお互い手の内を明かすことになるんじゃない？」

「ウチらは別にそれでもかまへんし、鈴は山田先生との試合の時に全部手の内明かしてるやろ」

へえ、そんなことやってたんだ。

「じゃ、明日から練習やな。」

「う、うん」

乗り気でない鈴をほつといて、美波は強引に推し進めた。

全くアイツは……

今日二人もフラグを立てやがったので、今まで競争率1倍だったのが一気に3倍になった咲也を見ていた鈴は、溜息をついた。

どうして鈴がそんなに本気を出しているのかというと、優良賞の景品のためだ。優勝の景品はないが、優れていると生徒会から認められた人間に送られる賞で今年の景品は。

「南の島、ペアチケットなのよね……」

競争率がとてつもなく高く、さらに優勝したら取れるわけではなく、『優れている』と認めさせなければならぬのだ。

咲也は学園の中でもトップクラスの強さを誇る。おそらく学年最強であるラウラの上官をしていたくらいなのだから。その咲也に教えてもらうことによって、優良賞をとろうと思ったが、思わぬ邪魔

が入ってしまった。

なんでなのよ……と叫びつつ、鈴はベットをコロコロしていた。

かつこよかったな……とローラはベットに寝っ転がってそんなことを考えていた。

庇ったときの一目ボレさせた顔を思い出して、ローラのあまり変化しない顔がついいにやける。

だからこそ、美波も咲也のことが好きだと気づいたときは、と、
いかアイツに恋っていう概念があったこと自体知らなかったローラは本当にびっくりした。まあ、一目ボレなんだろうけど。

胸のプレート——自分の専用機【ララバイカスタム?】をつつきながら。

「恋かあ」

とつぶやいて眠りについた。

隣のベットなのに堂々と「恋かあ」なんて言って寝た隣人を観察して肩を落とした。

美波は大阪府出身のIS操縦者だ。そしてこの黄色いシュシュは大阪の人々の努力の結晶。そして私はその希望の光。

【阪神四〇号】と、いう名称からも39回失敗してできたISと

いうのがわかるだろう。そして、自分はなぜか、

「あの時は不思議だったわー」

装備した瞬間に第二形態移行が行われた。不思議な感じだった。そして

「いきなり単一使用能力が使えて、そしてここに入学させられたんですよ」

ローラと鈴と出会った。

そうして思い出を掘り起こしているうちに眠くなってきたからゆっくり寝た

そしてそれぞれは……（後書き）

ねえねえ、作者ってね、もう片方の小説完全放置しているんだよ。

戦闘の幕開け（前書き）

作者はインフィニッ党です。

戦闘の幕開け

六月も最終週に入り、IS学園は学年別トーナメント一色にと変わる。その慌ただしさは予想よりも遙かにすぐ、今こうして第一回戦が始まる直前まで、全生徒が雑務や会場の整理、来賓の誘導を行っていた。

それからやつと開放された生徒たちは急いで各アリーナの更衣室へと走る。ちなみに男子組は例によってこのだっ広い更衣室を独り占めである。気前のいいことだ。多分反対側の更衣室では本来の倍の女子生徒を収容して、大変なことになっているのだろうけど。

「しかしすごいな……」

更衣室のモニターから観客席の様子を見る。そこには各国政府関係者、研究所員、企業エージェント、その他諸々の顔ぶれが一堂に会していた。

「三年にはスカウト、二年には一年間の成果の確認にそれぞれ人が来ているからね。一年には今のところ関係ないだろうけど、それでもトーナメント上位受賞者には早速チェックが入ると思うよ」

シャルロットが早速説明する。

「ダリイ……」

「鳳さんがヤル気になってるのにそれはないんじゃない？」

「だるいもんはダリイ」

一夏に視界を向けると……なんかアイツ妙に意気込んでねえか？

「一夏はボーデウィツヒさんとの対戦が気になるみたいだね」
「それはご苦労なこった」

ホントにご苦労だ。頑張ってくれ（人ごと）

「あ、対戦相手が決まったみたい」

モニターがトーナメント表に切り替わった。俺もそれまでの思考を一旦停止して（何も考えてないけど）そこに表示される文字をそこそこ見つけたが。

「は？」

一年の部 Aブロック

一試合目 織斑&デュノアペア 対 風井&クロムウェルペア

二試合目 秋葉&鳳ペア 対 ボーデウィツヒ&篠ノ之ペア

「マジっすか」

「一夏、いくよ」

「おう」

一夏とシャルロットがピットからアリーナに飛び立つ。ちなみに次の試合を待つために俺と鈴はピットで観戦中。

「さて、どうなるかな」

いろんな意味で勝負の行方がわかりにくい。美波のISは防御力が紙くらいしかないし（つまり一撃で終了）ローラのISは攻撃用の装備が無いし、本当に分からない試合になりそうだ。

と、早くも一夏が美波に突撃。しかしその前にローラが全能の盾を物理シールドにして防御するが、

「は？」

一夏が盾から”跳ね返る”。

ラバイカスタム？の単一仕様能力、『セルイージス』。全能^{イージ}の盾の形、大きさ、形態が自由に変えられる。つまり、盾の形態を『反射』に設定した結果があれだ。

「うつしやー」

跳ね返されている少し啞然としている一夏に美波が攻撃。一夏が吹っ飛ばされるが、その後すぐにシャルロットが美波に六〇口径アサルトカノン『ガラム』による爆破弾の射撃を浴びせた。おそらくハイパーセンサーで『阪神四〇号』の防御力の低さを確認してのとだろうが、

「させないわ！！」

ローラが全能の盾をエネルギーシールドモードにして弾を全て反射。今度はシャルルに浴びせる。

「クソッ！」

一夏がローラに突撃、しかし、今度は物理シールド、しかも、二

個に分裂させ籠手にして

「ぶへッ」

一夏を殴る。容赦が全くねえぜ。
その横から美波が一夏にハリセンを一発。どうやら一夏から潰すつもりらしい。

シャルロットが一夏に援護射撃をするが、全てローラによって防がれ、だんだんと戦況が美波たちに傾いてくる。

「あの二人と戦うと思うと背筋が凍るわ」
「そうだな」

ローラは完全な防御。美波は完全な攻撃。お互いが役割を決め信頼し合うことで試合を有利に進めていく。

と、ここで一夏が『零落白夜』を発動させる。

「来たわね」

ローラが物理シールドを展開”し直して”零落白夜を向かいうつ。

「うおらああああっ！！」

ローラが零落白夜を受け止める。零落白夜のエネルギーの刃が触れた途端

シューー

と音がしていきなり零落白夜の刃から光が消える。

「あれって!？」

「そうだ、俺と同じエネルギーの『吸収』だ」

俺が一夏の零落白夜を真剣白刃取りした時もあんな感じだった。つまり、ローラは盾の形態を『反射』から『吸収』に切り替えたわけだ。

零落白夜が切れている一夏に美波がすかさず攻撃。一夏のシールドエネルギーが底を付きかける。

「終わりやで」

その言葉と同時に美波のISが赤色に光り出す。単一仕様能力。

「”大車輪”か……何回聞いても変な名前だな」

そのまま一夏に突撃。一夏のシールドエネルギーは0に。

「アンタも終わりやで」

「くっ!！」

シャルロットが猛抗するも、あっけなく終了。ちなみに美波はISが動けなくなっているので一分アリーナで待機。つくづく変なISだ。

「さて、俺達の出番だぞ」

「ひと捻りにしてやるんだから」

前回のことに腹を立てているのだろう。妙に気合が入っている鈴が飛び立つのを見届けてから、俺はピットからアリーナに飛び立った。

「おらあああああつー!!」

試合開始と共に鈴が突撃し、双天牙月で攻撃する。

「ふん」

ラウラが右手を突き出す。――来る。

鈴と意見を交換していた時を思い出す。

『A I C? そんな大層なもんが積まれているわけ?』

『まあ、そうだな』

『でも、あそこまで完成度が高いなんて知らないわよ』

『いや、二年ほど前から計画されていたはずだ。』

『で、どうするの?』

『おいおい、俺の単一仕様能力を忘れたのか?』

簡単なことだ、投げられたA I Cを打ち消せばいい。

俺も飛び込んで鈴のA I Cをすべて解除する。

「このくらい考えていたさ」

とラウラは俺に、レールカノンを突きつける。

「ゲッ!!」

俺の相殺はエネルギーを吸収する。が、所詮エネルギー吸収でしかないので、

ドゴオ……

ギリギリで避けたが、この機体は『実弾』にとことん弱いのだ。

「ちょっと、アンタ大丈夫だったんじゃないの!？」

「ちよつと予定が狂った。まあ、このまま行くぞ」

問題ないはず……だよな。

鈴が衝撃砲を発射する、それをラウラはA I Cで解除。しかし

「A I Cは対象物に集中しないとできないんだよな」

「っ!!まさか!!」

相殺でA I Cを解除。その隙に鈴が衝撃砲をラウラに当てようとするが……

「私がいることを忘れないでもらいたい!!」

「あ、忘れてた」

(今更) 篠ノ之さんが登場して衝撃砲を切る。
それと同時にそのまま俺に切りかかる、が。

「クッ……!!」

真剣白刃取りで何とか持ちこたえる。刀って怖いね。その後すぐに体制を立て直そうと、手を離し避ける。

視線をラウラの方に向けるとワイヤーブレードで鈴の首を締めていた——ってヤバッ

拳でワイヤーを叩きわり、鈴を開放させる。

「無事か!？」

「少しアーマーが損傷しているけど問題ないわ」

ひとまず安心だが、そう簡単に終わるわけがない。

「鈴。お前は篠ノ之さんをやれ」

「了解。なるだけ早く済ませる」

「油断するなよ」

専用機なしではおそらく太刀打ちできないだろうが……専用機か。東さんあたりが作ってそうだけど。

「さて、お前の相手は俺だ」

「隊長、正気なのですか。長月も使わず戦うとは——」

「ラウラ、強さと攻撃力は一緒じゃないんだ。お前こそどうしたんだ？らしくねえぜ」

「隊長……あなたはとうしてそうも優しいのですか？私は今、上官に逆らっているですよ。普通ならこんな事をせずとも私を叩きのめすことができるはずなのに……——」

「それは、仕方がないからさ。俺にもお前みたいに思っていたことはあるし、何より……」

みなさん、ここからは一夏には秘密だよ。

「俺は正直一夏が憎かった。それでも、アイツには罪はないし、周りにも罪はない。だから、憎くても嫌いにもなれないし……だから学園^{コク}に来たとき拍子抜けしたよ。こんなやつを今まで憎んでたのかって。でもな、アイツは絶対正義を守るし、誰でも守ってくれる。だから俺が正しいかは、正直分かん。が、言えるのは……

お前のはただの逆恨みだ」

ラウラの顔が歪む。俺の顔も苦痛で歪んでいることだろう。俺は二度もラウラを拒絶したことになるのだ。

「だから、今日もお前を拒絶する。敵を討ちたければ、俺の屍を超えてゆけ」

俺の中で何かが燃え上がるのがわかった。きっとラウラもそうだろう。

（剛力突破、発動）

「「おおおおっ！」「」

ラウラと声が重なる。俺は拳を強く握り瞬時加速、ラウラはレールカノンを構える。

ラウラは倒れ、倒れ俺は地面を踏みしめた。

「あれ、終わったの？」

「おう、ついでに精根も叩き直した。篠ノ之さんは？」

「ああ、もう動けなくな——」

突如地面が揺れる。

「あああああつ！！！！！！」

ラウラが身を引き裂かんばかりの絶叫を発する

「なに、何が起きてるの！？」

「なっ！？」

俺も鈴も目を疑った。ラウラが、そのISが変形しグニャグニャに溶け、ラウラの全身を飲み込んでゆく。

黒く、深く、そして、全てを飲み込む闇がラウラを飲み込んでゆく。

「VTシステム……か」

戦闘の幕開け（後書き）

現在の咲也の嫁になる確率。

1、鈴

2、美波

3、ローラ

4、ラウラ

なお、作者によって常にプロットが変わってきているため、順位が毎日ものすごく変わります。参考には全くなりません。

長月（前書き）

やあ、広島にいつてきたよ

長月

VTシステム——正式名称、ヴァルキリー・トレース・システム。過去のモンド・グロツソの一部門受賞者の動きをトレースするシステムだ。それが目の前で起こっている。しかしあれは……

「IS条約でどこも開発できないはずなんだがな……まあ、上のヤツらの考えだろ」

巧妙に隠されてはいたが、操縦者の精神状態、機体の蓄積ダメージ、そして、操縦者の意志。この場合では願望。それらが揃うと発動するようになっていたらしい。

ボディーラインは、ラウラのそれをそのまま表面化した、少女のそれであり。最小限のアーマーが腕と足についている。そして、頭部はフルフェイスのアーマーで覆われ、目の箇所には装甲の下にあるラインアイ・センサーが赤い光を漏らしていた。

問題はその手の武器である。見間違いなはずがない。それは――

「雪片……」

教官の刀。それに酷似していた。
似ているというレベルではない。まるで複写^{トレース}だ。

俺は無意識のうちに、拳を構え直し……『力』を開放させた。

「うおおおおおおおっ！ー！」

（紫雲の解除——完了）

朔夜を部分展開——完了

落雷を部分展開——完了

朔夜と落雷の結合——完了

これよりIS—長月を発動します）

「なによ、あれ……」

鈴は思わずそうつぶやいた。咲也の周りから風が噴いたかと思えば、それは咲也を包む竜巻となり、それが晴れたあとからまた咲也が出てきた。しかし、それが重要なのではない。

「あのIS……」

そのISは紫雲ではなかった。灰色のカラリング。肩には同色の非固定浮遊部位。異様に大きい手は紫雲にそっくりだったが、それでも腕全体が違うものだった。

そして頭部は右だけバイザーに覆われ、そこから覗く目が金色に輝いている。

すぐにISのハイパーセンサーからデータが入ってくる。

それを見て鈴はあっけに取られた。

IS名 長月

装備 なし

シールドエネルギー 1000

近接特化型

コア No. 468 No. 469

全世界にコアは『467』。それなのにコアが存在しないはずのものだったからだ。そして二個表示されているコア。これは二個同時使用の証。普通なら暴走してしまう。

「うおおおおおおおっ!!」

咲也が雄叫びを上げラウラに突っ込む。土煙が立ち見えなくなっただが……

途中で煙が一気に晴れ、気を失っているラウラと、同じく気を失っている咲也が倒れていた。

『なんだ、お前ここまで弱かったのか?』

——…私は……弱い。

『だらうなあ。でも、これでやっと立ち直れただろ』

——咲也はずるい。

『なんで?』

——惚れさせて、そのまま去っていく……

『ひでえ言われようだな』

——それで、なぜだ。

『……俺って不幸だろ』

——まあ、そうだな。

『こんなまずい男を惚れさせちまったら、お前の人生ずたずただろ

……』

——だから断ったのか……

『もちろん』

——…そうか。ちなみに恋愛感情とかは？

『お前に対しての恋愛感情はなかった。ただ』

——ただ？

『今も昔もお前は可愛いぞ』

頭を優しくなでもらったかのような感触が伝わってきた。

『まあ、仕方ねえからお前も守ってやるよ

ラウラボーデヴィツヒ』

——…絶対惚れさせてやるからな。咲也。

『勝手にがんばれ』

全く、最後まで無責任なやつだ。と、ラウラは肩を落とした。

「咲也」

うるせえ、もうちょっと寝らせる。

このまどろみタイムは至福の時間である。軍人としてはまずいが、この時間は放棄できん。

「咲也」

でもこれ起きないとまずくないかな。どうせまた鈴か誰かが起こそうとしているんだろうが。

「仕方ない」

でも、このしゃべり方はラウラかな？うーん。って……！
唇になにか柔らかい感触が伝わる。目を開けると……ラウラが0
センチに迫ってきている。

しゃべろうと思ってても唇が邪魔だ。
無理やり引き剥がす。

「ら、ラウラ……！」

「やっと起きたか」

「起きるよ……！普通」

「まったく。あれから全く起きないから心配したのだぞ」

「俺のナノマシンの特性知っているよな」

俺のナノマシンは必要なときだけ覚醒する仕組みで、一度寝ないとカットできないので使用後強制的に気絶することになっている。

「知っているがここは絶好のチャンスだと思ってな」

「……ちよつとは堪えたのかと思ったら全然だな」

「むしろ受け入れてくれたから本調子だ」

ひどい、というか、あつさりファーストキス奪われた。あれ？こ
う言うのって女の方じゃないの？

さて、現在食堂だが。

「……優勝……チャンス……消え……」

「交際……無効……」

「……うわあああんっ！」

恐ろしい落胆ようだ。こんな事故があったから、もちろんトーナメント中止ね。

「あれっ？咲也復活したん？」

「やけに遅かったわね」

おう、あのコンビは元気そうだ。

「しんばいしたのよ」

ちなみに鈴は半泣きだ。

「心配させてゴメンな」

「ほんとうに？怪我ないの？」

「おう、全快だ」

実は足が少し痛いぜ。

「まったく、私の嫁のくせに」

ちなみに、ラウラはこんな感じだ。こんな間違った知識を植え付けているのは、黒ウサギ隊、隊長補佐のクラリツサ・ハルフォーフ大尉です。

「というか、俺はいつお前に嫁入りした」

「ふん、そんな事言っていいのか？」

「え？」

「……私をフツたくせに」

「「「え？」」」

「どういふことよサク!!」

「私にも教えて欲しいわね」

「なにがあつたんかなあ……？」

ええええええええ!! みんな怖いよ!! なんてそんな血走った目で俺を見るの!?

「「「さあ、洗いざらい話してもらおう!!」」」

ぎゃ、ぎゃああああああ!!

ふっ、死ぬかと思った。

さて、今日山田先生から大浴場が使用できることが伝えられたのでさっさと入るぜ!!

浴場にスキップしながら移動して……ん? 脱衣所で背中合わせで困っている男女がいるぞ。

「よう」

「あ、咲也」

「おまえらどうしたの？」

「いやその……」

シャルロットと一夏の目が泳いでいる。楽しい。

「まあ、冗談は程々にして、どうする」

シャルロットは女なので、俺や一夏とは一緒に入れない。

「一緒に入るわけにもいかないだろ。まあ、そういうことだからシャルルはゆつくりしてくれ」

うむ、もつともな意見だ。

「い、いいよ。それなら僕が脱衣所で待ってる。その……お風呂つてそんなに好きじゃないし。でも、一夏は好きなんだよね？」

「好きだ！」

即答かい！あと、シャルロット。真っ赤になるな！！

「どうした？」

お前それくらいは気づいてやれ。シャルロットが哀れだ。

「ど、どうも！？と、とにかくつ、一夏は先にどうぞ！僕のことには気にしないでいいから、ね？」

え？おまえ、まさかとは思うんだが……

「……いいのか？」

一夏の入っているところに押しかけるとか……

「う、うん」

「じゃあ入る！シャルル、サンキュー！この恩はいつか返す！咲也、行こうぜ！」

しないよn……おい、一夏、アイツにはまだツツコム事が……

「うおー」

風呂はめちゃくちゃ広かった。説明終わり。

「咲也。スゲーぜ」

「わかったから」

よほど嬉しいのか裸で走り回っている

からだを流してから風呂に入る。一夏はなんだか大声を出していた（注 真似しない様に）

「ふうふううう………生き返る………」

お前はおじさんか。

「一夏、俺は潜水するから風呂上がるときに呼べよ」

一夏、なんだか目がトロトロしているけど、まあ、いいか。

（お風呂シーンは原作を参考にしてくれ。書くとき作者の鼻から愛が吹き出るから）

さて、あいつら、俺がいるのにもかかわらず（潜水中。ドイツ軍なめんな）とんでもないことを繰り返してやがった。

幸せ者は死ぬべき、だな。

「ぎゃああああああああ」

朝から断末魔の悲鳴が聞こえる。そりゃそうだろうな。俺が噂を流したから。真剣とIS相手に逃げるのはキツイぞ。

HRギリギリで帰還してくるあいつらを横目に見ながらシャルロ

ットを探す。が、いない。

「み、みなさん、おはようございます……」

ふらふら山田先生が入ってくる。そんな調子で大丈夫か。

「今日は、ですね……みなさんに転校生を紹介します。転校生とい
いますか、すでに紹介は済んでいるといいますが、ええと……」

おかえりー。

入ってきたそいつは

「シャルロット・デュノアです。みなさん改めて宜しく願いしま
す」

「あ、あと、もうひとつお知らせがあるのですが……」

ん？まだあるのか？

「一組が増えすぎたので、秋葉くん、ボーデヴィツヒさんは二組に
移動です」

……は？

ちょうどその頃、一人の男がIS学園に到着した。

長月（後書き）

まだまだ続くぜ！！とところで、三巻でオルコツ党の皆さんに謝罪しなくちゃいけないんだけど、誰か謝罪文考えてよ。

あと、これからシャルロットの過去編に入るよ。

プロローグ（前書き）

か、書いてしまった。は、恥ずかしい。

ブローグ

これはまだ、彼が李赦驚で、”心”がまだ壊れていなかった時の
おはなし。

今日も私は屋敷の中を散歩する。

それ以外することがないから。

産まれた時から自分に自由がないことを思い知らされていた。

私はシャルロット・デュノア。12歳。性別は女。ISメーカー
のデュノア社の社長の愛人の子。

今日は新しい護衛の人が来るって話だったけど、また、平凡な日
々が続いていくことには変わりがない。

そう思っていた。

「どうも、新しい護衛の李赦驚です。咲也って呼んでください」

私と同年の男の子。それが新しい護衛だった。彼はどうも本名
で呼ばれることが何より嫌いな様で

「いや、やめてくださいよ。その名前嫌いなんです」

「じゃあなんで咲也？」

「姉がつけてくれたんです。失踪した親の代わりに」

日を重ねることに私と彼の距離は短くなっていた。彼と話す時間は至福の時間だったし、いつしか私たちは名前で呼び合う仲間になっていた。

私はそれまで恋愛をしたことがなかった。いつも屋敷の中にこもりつきりだったからだ。自由はない。そして恋をするようなことがなかった。

でも、彼と出会ってからとは違う。あの妙に凛々しくて、ちょっと優柔不断な彼に私は恋に落ちていた。

そんな中、物語は始まる。

プロローグ（後書き）

頑張って本編かくよ。

自由

私は、シャルロット・デュノア。13歳。性別は女。絶賛恋愛中。彼とは出会って今日はちょうど一年。

日課は彼と話すこと。それだけ。でも私は幸せだった。

その時、彼がいなくなるまでは。

「シャルロット」

「なに？」

出会って一年も経つと互いに打ち解けて、お互い敬語も使わなくなった。彼は中国人なのにフランス語がやけにうまかった。

「あのさあ、その言いづライんだけど」

「何何？」

この時私は内心フラグがたつたのかと思ったが

「いや、その。もう少しで俺はここを離れなくちゃならないんだ」
「……………」

彼がここを離れるという知らせだった。

「どこに行っちゃうの？」

「……………ドイツの軍」

彼がここからいなくなる。そう聞いて私は胸が痛くなった。私のただ一人の友達。彼がいなくなったあとの生活なんて考えたくなか

った。

「すまん」

彼は少しもどかしそうに言う彼に

「……咲也は悪くないよ」

と、声をかけることしかできなかった。

「その代わりと言ってはなんだが、一つだけわがままを聞いてやる」

彼がそう声をかけてくれた。彼の目は真剣の一字だった。

あまりに彼が必死だったので。いや、彼の目が本当に何でもいいと言ってくれたので私は言ってしまった。

「自由になりたい」

彼は少し考えてからこう告げた。

「……わかった、男に二言はない」

「それって何？」

「日本のことわざみたいなもんだ」

彼が本当に自由をくれるとは思わなかった。世界のＩＳシエア第三位のデュノア社だ。地の果てまで追いかけるのは目に見えていた。でも、彼を信じようと思った。なぜかは分からないけど。

「でも、今日は無理だから、明日な」

「うん！」

ここに居るよりかは遥かに良い。捕まっても、一瞬でも自由が手に入るならそれでも良かった。

「シャルロット」

早朝、そう呼ばれておきけると。目の前に咲也がいた。

「う、うわモゴ」

「静かにしてくれ。見つかったら俺も死ななきゃいけない」

私の寝室は2階だ。最初、彼がどうして窓から顔を出せているかが分からなかったが、次第に分かった。

IS。世界最強の兵器。それを咲也が展開していた。

「咲也、どうしてISが使えるの!？」

「まあ、俺の特異体質だ。それより早く行くぞ」

「え?うわ!」

彼は私を抱き抱えて飛び立った。しかも、俗に言うお姫様抱っこってやつで。

咲也のISは紫色。たいていのISは何か装備していたりするんだけど、彼のISはそれがなかった。

「加速するぞ!」

「う、うん」

私がそう言い終わると同時にISが一気に加速する。周りの景色が見えない。

「ほい、到着」

「う、うん」

ついたところは、街の郊外。

「ここはどこ？」

「ドイツ」

これを聞いて私は仰天した。ベルリンとパリの距離は800キロ超あるのだ。おそらくデュノア社のレーダーをかいくぐるためだろうが、それにしても速い。

「じゃあ行こうぜ」

「え？ど、どこに？」

「そうだなあ。街とかどうだ」

「そんな悠長なこと言ってるいいの？」

「お前は自由を求めた。俺はそれに従う。大丈夫、俺が守るから」

こんなセリフを聞いて落ちない女がおかしい。私は彼にメロメロになった。

「んじゃ、行くぜ」

「うん！」

「咲也」

「ん？」

「私、外に出るの初めてなんだけど……」

「ん？ああ」

彼はその言葉の意を察したのか私の手を握ってくれた。というか正直握ってくれないと迷う。いや、別に特に意味はないから。

「じゃあ、まあ、まず俺の知り合いのところに行こうぜ」

「知り合い？」

「まあな。俺を拾ってくれたやつって感じた」

そう言つと彼は歩きだした。ってなんで有刺鉄線いっぱいのところに行つてるの！？

「ここ、軍の施設なんだ。ホントはもうすぐここに入る予定だったんだけど遅らせてもらった」

「なんで？」

「お前が捕まらない様にしなきゃなんないじゃん」

「……ありがとう」

「気にすんなよ」

彼は入り口にいる兵隊に通行証を見せて、私を連れて中に入った。敷地の中はいかにも軍用施設という感じで、とても広かった。そこに軍用施設が乱立していた。

彼はそのうちの一角に私を連れていくと

「シャルロット、すまないが少しの間ここにいてもらうことになる。それでもいいか」

「うん！絶対帰ってきてね」

「ああ」

そう言つと彼は施設から去っていった。

彼が帰ってきたのは夕方だった。

「街のアパートが借りれた。後、俺はそこから通勤になるがそれでもいいか」

「え？まさか同棲…なの」

「うーん、まあ、そうなるな」

私は心の中で狂喜乱舞した。13歳にして好きな人と同棲。私とはにかく舞い上がった。

平静を装いながら、彼に聞く。

「でも、留守中に私が捕まったらどうするの？」

「追いかける」

「それでも捕まらなかったら？」

「何らかの形で自由だけでも守る」

彼は13歳の私にはかつこよすぎた。もうヒーローそのものが目の前にいるようだった。

そうして新たな生活が始まった。彼との生活は楽しかった。

半年後、あんなことがなければ。

自由（後書き）

どう...どう...

皆のもの、感想を待っております。

私と彼（前書き）

シャルロットの過去編が完結！！これからオルコツ党の皆様が不快になる三巻の始まりだぜ！！

私と彼

私はシャルロット・デュノア13歳。想い人と同棲中。幸せ。
当時ISに乗ってなかった私を訓練機に載せてくれたり。とにかく彼は私の自由を守ってくれた。

でも、そう長く続かなくなった。

それは、夕食時だった。彼と私が食卓に座つてのんびりテレビを見て。これって夫婦みたい。と私はのほほんしていた。
それは窓からきた。

バリーン！！

「シャルロット様！！」

「うわ！！執事さんじゃないですか。こんなにボロボロでどうしたんですか？」

窓を破って登場したのは、よく私をかわいがってくれた執事さんだった。

「お父様方が居場所を突き止めました！！もうココに向かってきています！！」

「やっぱりバレたか。まあ、時間の問題だったしな」

「ど、どうするの？」

「逃げるに決まってるだろ」

彼はすぐさまISを展開して私を抱き抱えて逃げようとする。が。

「無駄だ」

いきなり屋根がぽっかり開く。

「あのー。器物損壊罪で訴えていいですか？」

「そう言うお前を誘拐罪で訴えてもいいんだぞ」

私と彼の逃走劇が始まった。

まず彼がとつた行動は単純だった。

「おら！！」

ポツコリ空いた屋根から、私と執事さんを逃がすこと。

私を抱き抱えて。執事さんをおんぶして。もちろんISで、だよ。外には案の定ISだらけ。当時最新鋭だった第二世代型。ラファール・リヴァイヴがたくさんいたが。

「世代の差つてのを教えてやろう」

彼がニヤリとすると同時に彼のISの右手が巨大化する。

「おらあああああっ！！」

彼のISが最新鋭のISを次々と撃破していく。どうでもいいけどかつこよすぎ。

「ふん、愛人の子ごときによくそこまでやるな」

「あ、フェイトさんお久しぶりです」

父の側近で、親衛隊隊長、フェイト・クロムウェルさんだ。ちなみにスイス出身。

彼女にISは専用機、ラファール・リヴァイヴ・カスタム？。当時のISとしては最新鋭だった。

「どうしてそこまでするのだ。大体お前だってろくな人生歩んでないじゃないか」

「いやだなあ、僕はまだ13歳ですよ」

「いや、どのみちお前を殺すからここで終わりだ」

「できるものならやってみてくださいよ」

「その子を庇ったままでか。笑わせる」

「……知っていますか？このISは第四世代型なんですよ」

「ふざけるな。そんなモノがこの世に存在するはずがない」

「まあ、僕はまだIS乗り始めてから経験が浅いですからフェイトさんには勝てないかもしれないですけど」

本気でいきますから」

彼と私の周りを包むように風が起きる。それが晴れると。

「お、おまえ、その機体!!」

灰色のISがそこにいた。

「うわ!!!ナニコレ!!!」

しかも発動した本人が驚いている。

「まあ、驚いても仕方ないし、パワーアップしたってことでいいのか……」

「おまえ、本当にそれでいいのか……？」

「なんだか真剣勝負だったのにグダグダになってる。本当に大丈夫かな？」

「よし、行きますよ」

「おう、いつでも来い」

彼が何もないところで拳を振る。

すると

「うっ!!」

「すげえ!!」

拳から横向きの竜巻が吹く。

やってみた本人が驚いている。しまらないな〜

「なーんてな」

「う、後ろに!？」

彼は回り込んだフェイトさんに近接ブレードで攻撃される。

「く、クソ」

彼が距離を取るも、フェイトさんは武器をすぐに変え銃で攻撃してくる。

「私に勝つなんて一〇〇年速いんだよ」

彼があっさりフェイトさんに一撃を加えられる。

「あー」

「や、やば!」

彼は私を手放すと。下、つまり海に落ちていった。

「フェイトさん。後は頼みました」

落ちていく彼。私はフェイトさんに抱き抱えられ一命をとりとめた。

「おい、帰ってこーい」

「むーりでーす」

これが彼の最期の言葉だった。

私は家に帰るとものすごい説教をされた。もう本当に。殺されてしまうことは目に見えていた。が

「おい、おまえ、そのポケットの中身はなんだ」
「は、はい」

私はポケットの中に何か入っていることに気づいた。私がいれたものではない。

IS簡易適性試験。シャルロット・デュノア。結果A++

これでお前は自由、かな？

お前という楽しかったぜ。

咲也より

彼の置土産だった。

思わず涙がこぼれた。

IS学園に入れば国家、団体に干渉されることなく生活できる。そこまで考えて訓練機に乗せてくれていたんだ。と私は思った。

そんなこともつかの間。僕はある男によって自由を奪われる。

過去ーシャルロット編 完

私と彼（後書き）

シャルロット「あー……」

作者「何？」

シャルロット「僕なんでこんなキャラで描かれてるの？」

作者「……だんだん、こう咲也に心を開いて明るくなっていく感じにしたかったんだ」

シャルロット「それはそうとして、なんで過去編の最後こんなに暗いの？」

作者「……すまない、伏線なんだ！！ネタバレはできない」

シャルロット「ねえ、原作ブレイクするつもりでしょ、ねえ、ねえ……」

（作者はこの後一時間ほど問い詰められました）

シャルロット「まあ、それはいいけどさ……」

作者「おう」

シャルロット「執事さんは？」

作者「……」

シャルロット「執事さんは？」

作者「……途中で咲也が逃がしました」

シャルロット「今考えたよね」

作者「……はい」

（この後一時間ほどシャルロットに説教を食らいました）

作者「では、次回からの、『海だ！！謝罪だ！！逃亡だ！！』編をどうぞ見てね！！」

シャルロット「ちよつと待って！！謝罪って何！？そして逃亡って何！？そして何よりどうして原作と同じ要素が一箇所しかないの！？ねえ、聞いてる！？」

(作者はこの後一時間ほど)(以下略)(

日常に強制的に戻された俺達。やっぱり平和っていいね。

やあ、久しぶり。何？シャルロットに戻せて？そいつア無理な相談だ。

なに、ウザイって？前回出てきたあれはなんなんだ？

伏線に決まってるだろ！！まあ、フェイトさんに関しては（禁則事項です）だしな。

まあ、三巻始まるよ。

と、いうか今のはなんだったんだ。茶番か？

まあいい。今は朝だ。のんびりまどろみタイムを味わっている。
うん、ところで問題はこれからなんだが、俺の腕になんだか柔らか物体が存在しているんだ。

まあ、そんな些細な問題はまどろみタイムには勝てない。軍人失格？知ったことか。

「ん……」

よし、今すぐ起きるぞ。

そこから俺は迅速に行動に移った。

1・起きる

2・おそらく俺の腕にひつついてくるであろう不思議物体（全裸の少女）をさっさと振り落とす。

3・ベットのの上に落ちた、それ（全裸の少女）にさっさとシーツにくるめる。

4・食堂へ

「私の婿よ、待つのだ」

「いつ婚姻届を出したんだよ!!」

ここに来てからツツコム事が多くなった気がする。いやドイツでもあいつらボケ倒していたか。

「大体お前、ドイツでもおんなじ事しただろ。同じ手には二度と引つかからん」

「……むう」

二回目になるが、俺の周りの女子はなんでこんなに大雑把なんだ。

結局ラウラと食堂に行くことに。最近女子に押され気味だ。

で、現在寮食堂。右横にはラウラ。いつ登場したのか右には美波。向かいには鈴で、その横がローラだ。

「しっかし驚いたなあ」

美波がやけに大げさな口調で言う。

「まさか二人ともウチのクラスに来るなんてね」

ローラが続ける。

「まったく、こっちとしたらいい迷惑だぜ」

「全くだ」

「何が？」

「移動するのがめんどい」「シャルロットと離れたので友達が咲也
しかない」

「あれ？アンタたちってそんなに仲良かったっけ？」

「咲也は私の婿だ」

うん、違う。

「婚姻届は出してないし、第一、俺が認めていない」

「サクも大変ねえ」

鈴、人ごとだろ。

ちなみにメニューは、鈴が日替わりセット。ラウラがパンとコー
ンスープチキンサラダ。ローラがチーズフォンデュとグラスに入っ
たビールと……ビール！？美波が……何だ？あの丸いの。

「お、おまえら。何食ってたんだ」

「ビールだけ」「たこ焼きやけど」

「よし、美波は大阪の料理だということがよくわかった。で、ロ

ーラ」

「何？」

「ココはどこの国にも属してないといえども、やはりダメだ。という校則なかったけ。ていうかどこから取ってきた!？」

「自家製よ」

「こいつ確信犯だ!！」

「朝からうるさいわよ」

「いや、おかしいね。何よりこの事実をスルーしているみんながおかしいね」

ココの女子ってなんでこんなんだ？それともローラに限った話なのか？

「ほう。朝からビールとは。感心せんな」

「あ、織斑先生」

「どういうつもりだ、ローラ・クロムウェル」

「それはですね、ビールは水よりも栄養があるし、ストレスの解消にもなるし、健康にもいいと医学的にも証明されていて……」

ローラの説明が5分ほど続く。俺、鈴、美波はスルーしていたが、ラウラだけは興味津々で聞いていた。さすがビール大国。

「もういい。学校では飲むな」

織斑先生がついに諦めた。ローラ圧勝。

「全く、親子そろってめんどくさい」

ああ、フェイトさんもめんどくさいよね。ローラとは違う意味で。

「んじゃ教室行くぞ」

新しい仲間たちのいる教室へ

「あ、たこ焼きこぼした」

あれ、なんか聞こえた気がする。

「なんじゃこら」

一組もそうだったが、ココはさらに

「カオスだな」

ラウラがつぶやく。

「おい、それはないだろ、とりあえずこのクラスを褒めてくれ」

ちなみに今さっき発言したやつは女です。俺っ娘です。河野友香
っていう俺の隣の机の人です。なお、今後の出演予定はありません
(作者より)

では、このクラスの今の様子を一言で表してみよう。

ココはアメリカか！！

騒ぎすぎだろ。というか、紙飛行機が飛び交っている教室ってど
うなんだよ。賑やかすぎるだろ！！

「み、みなさん静かにしてくださいー!!」

担任の先生があまりに必死なので、皆が席につく。

「一組から移動になった秋葉咲也くんとラウラ・ボーデウィツヒさんが、今日から移動します。みなさん仲良くしてあげてください」

紹介が小学校つばいぞ!!担任!!ちなみに担任は桑野セリ(名前がカタカナなのはご愛嬌)で副担任は榊原先生だ(剣道部顧問)どうでもいいが担任と副担任を入れ替えたほうがいいと思う。

「後、みなさん来週から校外特別実習期間になります。全員忘れ物はないでください。三日間だけです。が学園を離れることになりません。自由時間ではハメを外しすぎない様に!」

そう、夏の校外学習——とどのつまり臨海学校なのだ。三日間の日程のうち初日は丸々自由時間。本当に学習させる気あるのか分からないぜ!女子はテンションが上がりまくっているが。俺とラウラが

「「水着買うのめんどい」」

と声を揃えて報告したところ、シャルロットと鈴からマシンガンのごときの猛注意を受けたので、買いに行かなくちゃならない……。

どうしよう……。

「後もう一件あります」

ん?まだあるのか?

「今日からIS学園に新しい整備士が仕事にあたりますが。あいにく彼は、高校生なのでこのクラスに来ることになりました。今は打鉄の整備をしているのでここには来ませんが、来たら仲良くしてあげてください」

ん？彼？

美波は掃除をしていた。
なぜなら

「なんでたこ焼きがあそこでおちんねん〜」

朝食時にたこ焼きが床に落下。三秒ルールに則り^{のつと}床に伏せ、たこ焼きを拾うと、結果今度は頭上からグラスが落下。グラスは避けたがビールまみれに。そしてトイレで洗濯していると、たまたま近くのスピーカーが鳴らず、HRに間に合わなかった。どこかの主人公じゃないけど不幸だ。

「最悪や〜」

誰もいないのに愚痴りながら、美波は机を運ぶ。

「ってこれ重!？」

中には教科書が満載。みなさん。教科書は持ち帰りましょう。

「つつと」

あまりの重さによろめく。

「おい、大丈夫か。なんかよろめいてるぞ」

「え！？さ、咲也！？」

よろめいてこけそうになったところを咲也がキャッチ。

「ど、どうしたん？」

「いや、ちよつと用事で職員室行ってたから教科書が置きっぱなしになってて……」

「そ、そうなんや」

咲也は美波が運んでいた机の中から教科書を取り出す。

「お、そうだ」

「な、何？」

「美波」

「うん」

「付き合ってくれ」

日常に強制的に戻された俺達。やっぱり平和っていいね。（後書き）

作者「では、テキストにコーナー始めるぞ」

咲也「はあ……」

作者「じゃあ、今日紹介されたやつが次の人の紹介をする感じな」
咲也「どういう感じなんだよ」

作者「咲也は、鈴と幼なじみだったり、シャルロットの護衛をしていたり、ラウラと同じ軍に所属していたり、いろいろ謎が多いキャラです。前回のシャルロット編では粹な計らいも見れました」

咲也「粹な計らいって……」

作者「あと、機体も特殊で、謎が多すぎて作者はパンクしそうです。なお」

咲也「なお？」

作者「まもなくこいつがどんでん返しします」

咲也「何話先の話だよ……」

レインシェイカー（前書き）

さて…久々の更新だぜ!!

レインシェイカー

こんにちは。皆さんおなじみローラ・クロムウエルです。
え？そんなにおなじみじゃないって？まあ、仕方のないことね…
ところで、今の状況について単純かつ高速かつスピーディーかつ
簡略的に説明するわ。

美波と咲也がデートしてる。

わかったかしら。わかったかしら。大事なことから二回言った
わよ。

場所は、駅前のショッピングモール『レゾナンス』。駅前という
か、完全に駅と融合してしまっているのだけねど…
私がそんな所でなにをしているのかというと。

「目標を発見」

「了解」

鈴と私で二人を尾行しています。

「…あのさあ」

「…なに？」

「…あれ、手え握ってない？」

「…そんなことわかってるわよ」

うん、間違いなく握っている。美波と咲也の手が…うん、親友と
いえども許せない。

「そっか、やっぱりそっか。アタシの見間違いでもなく、白昼夢で

もなく、やっぱりそっか。——よし殺そう」

握り締めた鈴の拳はすでにISアーマーが部分展開されていて、準戦闘態勢に。衝撃砲によるエネルギーで咲也が星屑になるまであと二秒ほどという感じね。

なんとも恐ろしい乙女の純情…いや、私もか。

「ほう、楽しそうだな。私も混ぜるがいい」

「「!?!」」

と、いきなり後ろから声がかかり、驚いて振り向く。
そこには、忘れもしないクラスメート。ラウラが立っていた。

「なっ!?!アンタいつの間に!」

「そう警戒するな。今のところお前たちに危害を加えるつもりはないぞ」

「し、信じられるとも思っているのかしら…」

いろいろ…うん、色々よ、いろいろあったしこつ言っふうちに打ち解けてもらっちゃダメな気もするんだけど…

「あのことは、まあ許せ」

サラリとそう言われて私と鈴は思わず呆ける。なんかおかしい。

「ゆ、許せって」

「はい、そうですと言えるわけが…」

「そっか、では私は咲也を追うので、これで失礼するでしょう」

そう言ってラウラはすたすたと歩き始めた——いや、ちょっと待って

「す、ストップ」

「お、追ってどうしようっていつの？」

「決まっているだろう。私も混ざる、それだけだ」

そうあっさりというもんじゃないと思うんだけど…

「ま、待ちなさいよ、待ちなさいよ。未知数の敵と戦うにはまずは情報収集が先決。そうでしょう？」

「ふむ、一理あるな。ではどうする」

「ここは追跡の後二人がどのような関係にあるのかを見極めるべきね」

「なるほどな。ではそうしよう」

こうしておかしな追跡トリオが結成された。

本当に毎度おなじみ秋葉咲也です。

今日は、美波と買い物に来ました水着の。

え？前回の「付き合ってくれ」？無論買い物に付き合ってくれて意味だけだけど。それを聞いた美波怖かったなあ。

まあ、そんなこんなで水着売り場につきました。男物と女物で分かれているな。

「じゃあ、俺はこっちで水着買ってくるから１１時にここで待ち合

わせな」

「ふふふふ、ウチの水着姿に見とれんことやなあ!!」

うん、美波は今日も元気らしいです。

美波は女物の水着売り場へと去っていった…

ところで、さっきから視線を感じるんだけど…気のせいかなあ…

「さてと…」

俺も水着を買わなければいけないのだが…うん、まあ、無難なやつでいいよね。

俺は赤色のトランクスタイルの水着を手にとって会計に向かった。

「まだだいぶ早いな…」

買い物が終わってしまったけど、特にこれと言って用事はない暇だ。

ベンチにのんびり座って、テキトーにISをつついてしていると…

「ん？」

全てのISは『コアネットワーク』と呼ばれる特殊な情報網でつながっている。もともと宇宙開発用のISには、お互いの位置を恒星間距離においても性格に把握する必要があったためそれぞれがお互いの位置を認識しあえるという特徴があったのだ。

もちろん正確な位置座標を割り出すためにはお互いの許可登録が必要なのだが、それがなくても大体の位置がわかるようになってい

しかし、そうしたコアネットワーク情報によって位置の特定を避ける場合、^{ステルス}潜伏モードというものを使用する。

でだ。これを見てくれ。下のは今のあいつらの位置だ

織斑一夏　IS学園

篠ノ之箒　IS学園

セシリア・オルコット　IS学園

凰鈴音　潜伏モード

ラウラ・ボーデヴィツヒ　潜伏モード

ローラ・クロムウエル　潜伏モード

風井美波　駅前

フェイト・クロムウエル　IS学園合宿所

バカばっか！！ラウラは間違いなく尾行してるし。ローラも鈴も潜伏モードってことは十中八九ラウラと行動してると見た。そして、なんでフェイトさんのも出てんだ。

俺は周りを見渡す。背後には吹き抜け。前には水着売り場。右方向は通路で、左方向は花壇、観葉植物——あそこか。

「げえ！！一瞬でバレたじゃないの！！どうしてくれんのよ！！」
「うるさいわね。バレてしまった以上しらばっくれるしかないでしょ」

「その会話全部聞こえてるぞ」

ローラはどこか抜けているなあ。

「おい。咲也ーどこにおるんー」

「おお、ここ」

「うんわかった今いくーって、なんで鈴とローラがおるん！？」

「大体あなたが抜けがけをするから…」

「早いもの勝ちやでー」

何の話をしてるんだ…ん？

「ラウラは？」

「ああ、途中で抜けてどっか行っただわよ」

ふうん、珍しい…

「アイツも水着買えばいいのに…可愛いし」

俺はボソツとそうつぶやいた。

ラウラは水着売り場にいた。数多くの水着が壁となっていて、向こう側から見られる心配がないからだ。

（ふむ。そういえば私も水着を持っていなかったな）

しかしまあ、学校指定のものがあるから別にいいかと考えるラウラ。

ちなみに、原作者の好みなのかなんなのか、ISの指定水着というのは紺色の芸術ことスクール水着―（名札付き）である。

（まあ泳げれば何でもいだろう。あの水着は機能的に優れている。代わりのものは必要ないな）

そう思い冷めた目で水着の列を眺めるラウラだったが、

「アイツも水着買えばいいのに…可愛いし」

いきなり、耳に咲也の声でそんな言葉が聞こえてきた。

トリオと話をしているとところまでは把握していたのだが、全く聞いていなかったなので完全なる不意打ちである。

（と、突然アイツはな、なんで…）

意味もなくキョロキョロと周囲を見やっしてから、ラウラは胸に手を当ててまぶたを閉じる。それは普段なら必要としない意識の集中法で、コールする番号を何度も間違いながらラウラはISのプレイベートチャンネルを開いた。

『——受諾クラリッサハルフォーフ大尉です』

「ああ、秋葉咲也中佐だ」

あれ？向こうがなんか騒がしいな？水着がどうか隊長と副隊長がどうか…ラウラ電話でもしたのかな？

「なんか騒がしいけどおまえら何やってんの？」

『はい、赤い米をたいています』

「……なんで？」

『副隊長に進展があつたらしいので…！』

「……そういう時には赤飯はたかねえ」

『え？』

「もうちょつとめでたい時にたくもんだ…」

『……そ、そんな…！』

「で、本題に入るんだが…」

『何か。用事でも？』

「いや、大したことではないんだがな」

『はい』

「フェイト・クロムウェル、李愛蘭の行方を今すぐ調べてくれ」

『了解しました。ちなみに私たちは副隊長を応援しています』

「しらん」

まったく、あいつらは………変わんねえな。

レインシェイカー（後書き）

咲也「作者のテキトーな企画に従って俺が紹介します。というわけで美波から」

美波「ふふふふ…ウチからとは咲也も見er目がいいなあ」

咲也「…美波もまだまだ謎が多いキャラで」

美波「ちよつとストップ！！どうしてウチのにつっこまんの！！」

咲也「…ISに乗った瞬間にセカンドシフトしたり、そもそもなぜ大阪の中小企業がコアを手に入れたのか、謎は深まるばかり…」
美波「…え？これで終わりなん？もっと紹介するところあるやろ、例えば

えば
ブッン！！

海に着いたら死亡宣告！！

さあ、皆さん、臨海学校本番だ！！

現在バスに揺られて海岸線に沿って移動中。天気は快晴で絶好の初日だ。

ところでいまのバスの様子を説明しようか。

なんじゃこの騒ぎは！！なんで席立ってるやつがこんなにいるんだよ！！

「そろそろ目的地につきますー！！みささん席に着いてくださいー！！」

桑野先生があまりに必死なのでみんな席につく。このクラスは本当に分からない。

言葉通り程なくしてバスは目的地である旅館前に到着。四台のバスからIS学園一年生がわらわらと出てきて整列した。

「それでは、ここが今日から三日間お世話になる花月荘だ。全員、従業員の仕事を増やさない様に注意しろ」

「「「よろしくお願いしまーす」「」「」

教官の言葉の後、全員であいさつする。この旅館には毎年お世話になっているらしく着物姿の女将さんが丁寧にお辞儀をした。

「はい、こちらこそ。今年の一年生も元気があってよろしいですね」
年は三十くらいだろうか、しつかりとした大人の雰囲気漂わせている。感じていうとローラみたいなの……

「それから大分遅くなったが、2組に新しい生徒が編入する。来い」
教官に呼ばれてやってきたのは。

「えー、からいわなるひと唐岩徳仁です。研究員として配属されましたが、打鉄の整備の缶詰でなかなか行けませんでした」

おもいつきり男だった。

身長はかなり高く、体育は細い。顔は不機嫌っ面でポーカーフェー
ーみたいなの。

さて、毎度おなじみあれが来ますよ。

「きゃあああああああああ」

「男よ男、三人目!!」

「しかも今度はカッコいい系の!!」

「ええい!! もう驚かないわよ!!」

「おい、黙れ」

教官がうざったそうにそう言う。

「こいつはたった一週間で打鉄の伝達効率を80%引き上げたんだからな」

「「「え?」「」「」」

その場が固まった。そんな芸当はISを根本的に変えてしまうからだ。

「というわけで、今日からこいつが配備される。合宿中のISの不良は全てこいつ持ちだ。以上、解散!」

「それじゃあ皆さん、お部屋の方にどうぞ。海に行かれる方は別館の方で着替えられるようになっていきますから。どうぞご利用なさってくださいな。場所が分からなければいつでも従業員に聞いてくださいまし」

女子一堂が固まりつつも、はーいと返事する。俺も部屋に行こうって、どこだ？

「おい、おまえら」

「「「はい」「」」

俺と一夏と徳仁が返事する。

「おまえらの部屋はこっちだ、ついてこい」

「えーと、織斑先生。俺達の部屋ってどこになるんでしょうか」

「黙ってついてこい」

一夏が教官に言論封殺させられる。ちなみに旅館の中は広くて綺麗だった。さすがIS学園ご用達。

「「「こっだ」

「「……え?こっって」

ドアには『教員室』の文字。まさかとは思うが…

「最初は個室という話だったんだが、それだと絶対に就寝時間を無視した女子が押しかけるだろうということになってだな」

はぁ、と溜息を着いて教官が続ける。

「しかし、男子が増えたので、私と同室はさすがにきつい。だから、ここになった」

その横の部屋だった。バンザイ。

「それでは、行つて来い」

織斑先生が自分の部屋に入る。

俺達も部屋に入る。

「おおーすげー」

一夏が感嘆の声を上げる。中は三人部屋だというのにかなり広く、外側の窓が一面窓になっている。そこから見える風景は素晴らしくて…うむ、圧巻。

「そつえば、打鉄の伝達効率を80%引き上げたつてのは本当か？」

一夏がまた聞く。

「…改良していたら自然にそうなっただけです」

あ、意外と俺とうまが会いそう。

「おい、お前等、海に行かないのか？」

「あ、俺行く」

「じゃあ、俺も行くでしょう」

つつわけで海に繰り出します。

「……………」

「……………」

「……………」

更衣室のある別館に向かう途中で三人で固まる。

地面にウサ耳が生えているからだ。

間違いなく。篠ノ之東博士である。

他の二人がどういう理由で固まっているかは知らないが、俺にとっては大変やばい。なんせ商売敵の弟なのだから。しかもパクツた奴。

「えーと、抜くぞ？」

一夏がそう聞くが、俺にとっては死活問題だ。出てきた途端溶かされても仕方ない。いや！仕方なくはないんだけど…

徳仁も横に首をブンブン振っている。

「えーと、じゃあ、先に行つててくれ」

「ちょっと待てお前。間違はなく抜くつもりだろ!!」
「こつちにとつては死活問題なんですが」

徳仁も何かしら事情があるらしい……篠ノ博士すげえ…

「ちょっと、アンタ達何やってんのよ」

「ちょっと今から生死を分ける討論をするところだ。ちょっと後にしてくれ」

「は?どうでもいいけど早く通してよ……よつと。ん?なにコレ?
…よいしょつと」

鈴のバカあああああ引っこ抜いちゃダメだ!!

キイイイイイン…

「ヤバい、来た…」

「……逃げますよ」

俺と徳仁は鈴を連れて、別館へと走る。

「はあ、はあ」

「……どうやら気付かれていないようですね」

やべえ、溶かされるところだった…

「なんなのよ…」

ちなみに鈴は不機嫌である。

「まあ、海でな…」

「はあ…お詫びになんかしなさいよ…」

なんか、と言われても…

「じゃあ、ここだな…」

「私の水着に悶えるんじゃないわよ!!」

自信満々に宣言である…可愛いね。

さて、海である。まごころ事無き海である。

「ところで、さっき気づいたんですけど」

「ん？」

「織斑さんって馬鹿ですよ」

「おう!!」

そこは激しく同感である。まあ、そのフリをしてIS学園に潜入している…なんかだったらすごいけど。

「サ、ク~~~~」

いきなり俺に飛び乗ってきたのは鈴だった。水着になると俺に飛びつく癖はまだ治ってないようだ。

……うん、こつやって冷静に実況しているようだけど、ものすごく緊張してます。

ちなみに、着てるのはスポーティーなタンキニタイプ。オレンジ

と白のストライプで、へそが出ているタイプ。

「あれ？どうしたの？サク」

お前のせいだよ！！と叫びたいところだが、うかつに注目を浴びるのも危険だ。例えばラウラが俺を切り裂きに來たり、美波がハリセンで百叩きとか。

「……ちゃんと準備体操しないと溺れるぞ」

「アタシが溺れたことなんて無いわよ。前世は人魚ね、きっと」

そうこう言いながら俺のからだをしゅるりと駆け上がって肩車体制に。前世は猫に決定。

あれ？徳仁は？

「おー高い高い」

「いやいや、女子が見つけたら俺が危ないんだけど……」

主に、ラウラとか美波とか。

「あー！あ、秋葉くんが肩車してる！

「ええっ！いいなあっ、いいなあっ！」

「きつと交代制よ！」

「そして早いもの勝ちよ！」

なにがそしてだ！交代制と早い者勝ちがつかってないぞ！！

「鈴、降りてくれ」

「仕方ないわね」

よっ、と俺から飛び降りる鈴。ひらりと手のひらで着地して、そのまま前方前方宙返りで起立。前世が猫である確証が得られた。と、ここで、教官の声で放送が入る。

『この旅館に泊まっているIS学園の生徒はすぐに玄関に集合！！緊急だ！！また、砂浜に居る生徒は着替えてから来ること！！』

なにがあつたのかは分からないが、ものすごく焦っていることだけはわかった。俺はすぐさま別館目指して走りだした。

「ここにいない生徒は織斑と篠ノ之と風井と唐岩とクロムウェルでいいな！！」

え？

「セシリアさんは？」

「アイツは別だ」

「唐岩さんとクロムウェルさんが、今来ました」

見ると水着姿の徳仁がローラをおんぶして。砂浜の方から上がってきていた。

「……まあ、いい。これから今の状況を説明する」

そう、それだ、合宿を中断するほどの”何か”と言うのは、かなりのモノのはずだ。

「セシリア・オルコットが自室で死亡していることが確認された」

は？え？あの、イギリスの代表候補生が？

「ただし、ある筈のISが無くなっていたので、犯人が見つかるまではここを動けないが、いつまでも居るわけにはいけないので、三日間でここを動く。それまでに犯人が見つければいいのだが…」

ISを奪うためにオルコットさんを殺した？違う。そんなことをしてまで奪わなくとも、剥離剤なんかもあるはずだ…いや、そもそも敵を『亡国企業』と考えるのが間違いなのか？

いや、そもそもオルコットさんは何故ISの絶対防御を発動させなかった？普通に考えて生死に関わるような事ならISを発動させるはずだ。そうなるとISが生きている限り絶対防御があるので死なないはずだ。

「では、全員本館にて待機！！明日は予定通り訓練を行うので早めに寝ておけ！！」

これが俗に言う謎が謎を呼ぶ展開なのか…いや、本当はもっと単純なことなのかもしれない…

海に着いたら死亡宣告！！（後書き）

千冬「このような展開にして本当に申し訳ない…私からもしっかり謝っておく…本当に済まない！」ドゲザ！！

千冬「では、作者から一言」

作者「……作者だ………文句あつかー」

千冬「……お前は……」クビシメギリギリ

作者「ちょ、く、苦しい」

千冬「どうしてそんな火に油を注ぐ真似を！！感想が批判でいつぱいになるだろ！！」

作者「だ、だって…感想書いてくれた人が…こうすればいいって…ちょ、いい加減首締めるのやめて…」

千冬「全く。この展開には私も反対だったのに…」

作者「別にいいじゃん。どうせ帰って――」

千冬「またお前はそんなネタバレを……」クビシメ（イカリヤク）

オルコツ党の皆さん。怒らないでね？

動き出す物語

現在の死傷者・行方不明者

セシリア・オルコット 死亡

ローラ・クロムウェル 頭部を軽症

織斑一夏 行方不明

シャルロット・デュノア 行方不明

風井美波 行方不明

時間はあつという間に過ぎ、現在7時半。大広間3つ繋げた大宴会場で、俺達は夕食をとっていた。

普通ならば賑やかに夕食を食べていただろうがそうはいかない。

オルコットさんが死んだ。死因は出血死。腹を包丁で刺されたそうだ。

他にも、一夏とシャルロットと美波が行方不明。ローラは命に別状はないらしがまだ眠っている。

大広間に言葉はなく、中には泣き出している生徒もいた。

例えば鈴。ライバルを無くしたせいかな、俺の隣でポロポロ涙を流している。

例えば篠ノ之さん。こちらも完全に意気消沈。

例えばラウラ。親友の身になにかあったら……と、かなりナーバスになっている。

楽しいはずの夕食がこんなことになってしまった。

こうなってくると、一夏と美波とシャルロットの行方が心配だ。
犯人に何らかのことをされている可能性がある。

取り敢えず今日は明日に備えて眠らなくてはならない…

合宿二日目。今日は無論待機である。さらなる被害者を出されては困る。学園はもちろん俺達も。

ローラはまだ目を覚まさない。

現在部屋で寝っ転がっている。やることないし。

「徳仁」

「何ですか？」

転校生、もとい徳仁に話しかける。徳仁は今、ドライバーやペンチでなにか機械を分解していた

「お前、ローラをおんぶして帰ってきたのは何だったんだ？」

徳仁は、分解する手を止めこちら側を向く。

「僕にも秘密にしたいことだってあります。あなたもでしょう？」

昨日からこんな感じではぐらかされている。まあ、俺にも秘密くらいあるけど。なんか含みのあるいいかたが気になるんだよね…

「まあ、もうすぐそんな事言ってられ無くなりますけど——」

「えっ？」

『緊急、緊急。専用機持ちは今すぐ大宴会場に集合！至急だ！』

かなり慌てた教官の声が旅館に響いた。

「では現状を説明する」

大宴会場には、行方不明者、死傷者を除く専用機持ちと、教師陣が集められた。…なぜ篠ノ之さんがいるのだらう。いや、大体想像がつくけど。

照明を落とした暗い室内に、ぼうつと大型の空中投影ディスプレイが浮かんでいる。

「二時間前、ハワイ沖で試験稼働にあったアメリカ・イスラエル共同開発の第三世代型の軍用IS『シルバリオ・ゴスベル銀の福音』が制御下を離れて暴走。監視空域より離脱したとの連絡があった」

……おい、もっとちゃんとしてくれ。いや、人のことは言えないが。

「その後、衛星による追跡の結果、福音はここから二キロ先の空域を通過することがわかった。時間にして50分後。学園上層部からの通達により、我々がこの事態を対処することになった」

一夏だったらここでもばーんとしていただらうがあいにく俺はそ

んな性格じゃない。

「教員は学園の訓練機を使用して空域および海域の封鎖を行う。よって本作戦の要は専用機持ちに担当してもらおう」

……荷が重い。そして面倒くさい。

「それでは作戦会議を行う。意見があるものは挙手するように」
「はい」

早速手を上げたのは鈴だった。

「目標ISのスペックデータを要求します」

「わかった。ただし、これらは2カ国の最重要軍事機密だ。けして口外はするな。情報が漏れいした場合、諸君には査問委員会による裁判と、最低でも2年の監視がつけられる」
「了解しました」

早速開示されたデータと共に相談が開始。

なにになに？

- ・ 広域殲滅を目的とした特殊射撃
- ・ 攻撃と機動に特化
- ・ 特殊武装
- ・ 格闘性能未知数。スキル不明

……さすが軍用機。いや、紫雲とシュバルツェア・レーゲンも軍用機だけ。

「偵察は行えなかったんですか？」

「ああ、この機体は今も超音速飛行を続けている。最高速度は2450キロを超えるとある。アプローチは一回が限界だろう」

「一回きりのチャンス…か」

一撃必殺の機体。もともと二機あった。しかし、その両方が行方不明。…そう白式と阪神40号だ。

いい作戦が思い浮かばず、場の空気が重くなる。そこに

「やつほ——」

脳天気な悪魔がやってくる。ちなみに天井から。

「お、早速迎撃！」

光線銃を俺に向けるな！

「待て——い」

そしてついでにオバカさんも。ちなみに畳の下から。

「お、咲也元気にしてるかな？」

「姉さんのせいで心が折れそうだよ…」

李愛蘭リ・アイラン、俺の姉だ。天才ハッカーだが……まあ、バカだ。

「……おまえら」

二人の頭に拳骨が落ちる。

とりあえず溶かされずに一命を取り留めた俺は、篠ノ之（姉）の作戦を聞いていた。

「ここはね、断・然！紅椿の出番なんだよっ」

紅椿：やはり篠ノ之さん、専用機をもらっていたか…

「展開装甲をこうこうこうして、ほら！スピードバッチリ！」

と、ここで李（姉）が立ち上がる。

「待てーい。それだったらこっちのが速い！」

さすがパクリ！（泣）

姉二人が変な討論を始めたので、俺達は、姉どもを無視して作戦を立てた。

結局。最高速度が速い篠ノ之さんと背中に鈴を載せた俺が行くことに。ろくな役が回ってこないぜ。

俺が剛力突破で足止め。その後三人で戦闘を行う。とまあ、大雑把にはこんな感じだ。

束さんが文句言いながらも紅椿の展開装甲を調整してくれた。ウ

チの姉？逃げた。

「あ、あと、織斑先生」

「何だ？」

「長月の使用許可をください」

「……うむ、わかった。くれぐれも気をつけろよ」

「またまたー。大丈夫ですよ。何年やってると思ってるんですか」

「初心忘れるべからずだ」

「……一夏。見つかるといいですね」

「……ああ」

時間は現在11時半。

一言。熱い。

「来い、紫雲」

「いくぞ、紅椿」

「……っていつかなんでアタシまで駆りだされてるんだろ……」

「人員は多いほうがいいだろ」

そういえば、篠ノ之さんが調子ぶっこきすぎな気がする。いや、仕方がないのは百も承知だが。

まあ、この作戦に欠点があるとしたら。

俺と篠ノ之さんがあんまり面識がないってことかな。

『秋葉、聞こえるか』

ISのプライベートチャンネルから教官の声が聞こえる。

「はい、聞こえています」

『どうも篠ノ之は浮かれているな』

「仕方ないですよ。織斑先生だってそうだったんじゃないんですか？」

『……まあな』

昔を懐かしむような声で、言う教官。

「まあ、意識しますよ」

『ああ、頼んだ』

それから教官の声がオープンに変わる。

『では、はじめ！』

——作戦開始と行こうじゃないか。

「……はっ！」

「やっと起きましたか……」

「え？唐岩…徳仁…？」

「名前を覚えていただいて光栄です。ローラ・クロムウェル」

「……ここはどこなのかしら……」

「旅館ですよ。それにしても眠っている期間が長かったですね」

「……今何時」

「あなたが襲われた翌日の11時ですよ」

「他の人達は？」

「セシリアさんが死亡し、風井さん、織斑さん、デュノアさんは行

方不明です。そして、残った専用機持ちは特殊任務に駆り出されていますよ」

「で、律儀に枕元で私が起きるのを待っていたわけは？」

「話が早くて助かります。実はあなたのISはあの襲撃の際に盗まれていましてそれを伝えに来たのもうひとつは…」

「早く言いなさい」

「風井さんからの贈り物です。彼女は行方不明ではなく意図的にこの旅館から逃亡しています。あなたのISが盗まれたことを伝えると、『これをウチやと思って』と」

「……黄色いシユシユ…?」

「はい、彼女のISです。すでに僕があなたに合わせて設定してあります。あとは、あなた次第…」

「では、僕はただの整備士ですので」

もつれる

現在の死傷者・行方不明者

セシリア・オルコット 死亡

風井美波 逃亡

織斑一夏 行方不明

シャルロット・デュノア 行方不明

視界が一気に吹っ飛ぶ。常時瞬時加速をしているような加速で敵に迫っていく。

紅椿と紫雲の展開装甲が開く。そしてさらに加速する。

見えた。

全身が銀色。そして何より異質なのが頭部から生えた翼。

スラスターと展開装甲の出力をさらに上げる。

「足止めするぞ！」

「了解！」

鈴が背中から離脱する。

剛力突破を発動。間合いを詰めて殴り飛ばす……つもりだったがなんと最高速度のままこちらに反転して後退の姿勢で身構えた。

しかし、問題ない。懐に入って殴り飛ばす。

そのつもりで、こちらも速度は落とさない。

「敵機確認。迎撃モードへ移行。《銀の鐘》^{シルバール}、稼動開始」

「!？」

オープンチャネルから聞こえてきたのは抑揚のない機械音声だった。けれど、確かな『敵意』を感じた。

ぐりん、と、いきなり福音が体を一回転させ、拳をわずか数ミリの精度で避ける。それはP I Cを標準搭載しているI Sであっても、かなり精度の高い操縦だ。

「翼…か」

高出力の多方向推進装置というのは他にも多く存在する。けれどここまで精密な急加速というのは見たことがない。

「篠ノ之さん！鈴！」

「任せろ！」

しかし篠ノ之さんと鈴の攻撃も紙一重のところではかわされてしまふ。それはまるで踊っているかのようなそんな動きだった。

「おらあ！」

剛力突破で吹き飛ばそうとした俺だったが、他の所が隙だらけになり。それを見逃す福音ではなかった。

「!？」

銀色の翼。スラスターでもあるものの、装甲の一部がまるで翼を開くように開く。

(あちゃー…)

砲口、だ。

一斉に俺に光の弾丸が打ち出される。

が、俺はまだ死ねない。

「おらあああああああああ」

灰色の機体。長月で復活する。相殺の効果も万全。ダメージもほぼゼロ。動体視力、視覚解像度などを数倍に跳ね上げる右目『オーダン・オージュ?《オーデインの瞳》』も使用する。

「おらおらあああ!」

光の弾丸を、避ける、また、両手で打ち消す。すきあらば攻撃する。

所詮三対一。そう思っていた。

突然、福音が強烈な光の珠に包まれた。

「逃げろ!」

鈴と篠ノ之さんに注意を促す。

第二形態移行

ISとの相性で移行する、ISの変化形態。

そして、切断された頭部からゆつくり、ゆつくりと、まるで蝶がサナギから孵るかのようにエネルギーの翼が生えた。

逃げ遅れた鈴がその翼に抱かれる。

刹那、あのエネルギー弾雨をゼロ距離で喰らい、全身をズタズタにされて鈴は海へと堕ちていく。

ボロボロな鈴。あまりにも不利な状況。

鈴が少しずつ墮ちていく。

俺は、鈴を必死で追いかけて。海に落ちる寸前で拾い上げる。

え？めをささないわけがないだろ。ぜったいぼうぎよがあるんだから

あ、そういえばそれをつきぬけることができるんだっけ？アハハ
ハハハハハ

[illegible]

咲也を、いや、ここでは朔夜を中心に爆発が起こった。箒、福音もろとも爆風に巻き込まれる。

そして、次の瞬間。咲也の右手から炎が上がり、それが福音に投げつけられた。

が福音は難なく避ける。しかし、その間に咲也は福音に近づいている。

気がついた福音が翼を彼に叩きつけようとするも、咲也はそれを避け福音を殴り飛ばす。

それだけだった。それで全てが終わった。

咲也は左手で鈴を抱き抱えている。

箒は、震撼した。

『早く逃げろ！おい！篠ノ之！！』

上ずった千冬の声など聞こえなくなってしまった。

「おい…起きろ」

「はっ！アタシ何秒寝てた！？」

「バッチリ1時間熟睡してた」

「起さんかい！」

小学校の時、アタシとアイツは仲良しだった。付き合ってはいな

かったけど。席も隣の席だったし。まあ、後ろに。

「ははは、仲いいね。付き合ってるの？」

「「ちげーよ！」」

なんていう輩もいたし。ん？楊っていう友達。

で、その時はもう好きで好きでたまらなくて顔が真っ赤になってたくらい。でも、幼なじみだったし、そんなに特別な関係はその時は望んでいなかった。

小学校四年生。転校することになった。たまらなく悲しかった。お父さんもどこかに行った。慰めてくれたのは咲也。そしていよいよ翌日になって…約束した。

「あ、あのさあ…」

「ん？」

「大人になったら。私の酢豚を毎日食べてくれる？」

「……口の中が酸っぱくなりそうだな」

「……ひど」

「ははは、冗談だよ」

「……咲也は私がいなくなっても寂しくないの？」

「寂しくないわけねえだろ。でも、なにがあったって地球上にお前は居るだろ」

だから寂しくねえよ。会おうと思えばまた会えるから。

そしていまに至る。

旅館の時計は四時前を指している。

咲也は未だ海上で鈴を抱き抱えたままとどまっている。

箒は千冬に呼ばれて、大広間へと向かう途中だった。

今でもあの光景を思い出すと体が震える。

あの福音を一発で仕留めるほどの強さ。そして、あのうつろな目。なにを意味しているのかは箒でもわかった。

暴走、だ。

大広間では、ラウラが正座をして、精神を集中させていた。

今の戦力は。箒とラウラのみ。

「篠ノ之。座れ」

「分かりました」

千冬が箒に座るよう言う。

「篠ノ之。あれがなんだか分かるか？」

「……たぶん何らかの暴走状態だと思います」

「そうだ。あれは暴走している。黒騎士事件を知っているか？」

「はい、2年前、突如ISが出現して、ドイツ軍に14名の死亡者を出した事件ですよね」

黒騎士事件。

そのISがのカラーリングが黒だったことから、白騎士事件と対

比してそう呼ばれるようになった。

まるで白騎士のようにドイツ軍の敷地に出現し、捕獲にかかったドイツ軍14名を死亡させた有名な事件だ。

「…そうだ、そして、黒騎士の正体は…咲也なんだ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8924q/>

IS 拳で戦うハメになりました

2011年5月31日23時33分発行